

私の思い出・老後の初心

—追憶・随想—

第1部 追憶

—あの頃のこと—

第2部 随想

—この頃思うこと—

第3部 老後の初心

—これからの思い—

2009年3月

加納 時春

目次

		ページ	
第1部	追憶	1. 子供のころの思い出	5
		2. 僕たちの小学校時代	10
		3. 賢い犬	16
		4. どじょう捕り	17
		5. 怖い話	19
		6. メジロ	21
		7. 葉山の守さん	23
		8. 僕たちの旧制中学時代	25
		9. お茶の木	29
		10. 上高地の思い出	31
		11. 春の足音	33
第2部	随想	1. 出生の記	35
		2. 母の故郷	36
		3. 樟脳屋	38
		4. わが故郷の四季	40
		5. 楽しい畑仕事	46
		6. 老友	48
		7. わらじ	49
		8. ひよどり	50
		9. 悪童	51
		10. はったい粉	53
		11. 公園の椿	55
		12. 故郷の細道	57
		13. カラス	59
		14. 硬い豆腐	61
		15. ダイガラ	62
		16. 自然の恵み、川かに漁	64
		17. 土佐弁	66
		18. 剣山へ登る	72
		19. 食生活の今昔	74

1. 農村風景の今昔
2. 食の安全
3. 農業の将来
4. 私自身の野菜作りの実践

2009年3月

70歳を過ぎると、月日の経つのが、これまでよりさらにスピードアップされたように思う。生まれ育った故郷を出て、半世紀以上が過ぎた。年とともに、子供のころの田舎の生活が、懐かしく思い出される。子供のころの思い出は、不思議に正確に記憶に残っている。

神戸シルバーカレッジで3年間、神戸シルバー大学院で5年間。主として環境問題や農業問題について勉強させてもらっている。古来、農業は我々人類にとって最も基本的な産業であった。現在、若者は都会へ集中し、田舎には老人しかいない。農業の後継者不足、減反政策、農薬問題など農業を取り巻く環境が著しく悪化している。このような問題を実際に授業で学び、いろいろの資料を見るにつけ、将来、我々の食の問題はどうなるだろうか。大変気がかりである。我々年配者の子供のころの農村風景も、現在は大きく様変わりしている。これからの村の風景はどうなるのだろうか。

今までに思い出すままに書きためてきた子供のころの思い出を単にまとめ懐かしむだけではなく、今後の行く末を考える一助になればとここに一冊にまとめることにした。

2009年3月

子供のごろの思い出

第1部 追憶

—あの頃のこと—

子供のころの思い出

高知県中部、国道32号線沿いの山間部。じゃり道が曲がりくねり、あちらこちらに穴ぼこがあいている。1日に数台の車しか通らない。目に沁みる様な緑の木々で覆われた山あい、こま切れの田んぼや畑が続き、その中を川がくねくねと流れている。水は澄み切っているから魚が手に取るように見える。

僕の父は仕事でもう何年も中国にいてるので、家は母と男四人、女二人の六人兄弟で、僕が長男である。家は非農家の為戦争末期から終戦後にかけて食べるものでは大変苦労した。

母が家の周りの小さな畑で細々と野菜やいも類を作って食料の補足をした。又父がこの家を建てるとき梅、柿、栗などを植えていたので、春は梅、秋は柿、栗が家のそばで収穫できた。

さつまいもは親戚から山の畑を借りて作っていた。家から子供の足で約1時間ぐらいのところ。いつも母と一緒に通った。この畑は小学校へ入る前から作っていたので弟と2人、母の荷物にすがりつきながら歩いて行き、芋ほりの時期、11月ごろ夕方になると肌寒くなり、鼻水をたらしながら仕事が終わるのを待った。道のりが遠いので途中知り合いのおばさん達ががんばれと声をかけてくれたり、途中にはへびの巣と呼んでいた恐ろしい場所があった。高さ1メートルほどに小石を積み重ねたその中に、へびがうようよするほど住んでいて、時々通り道にまではみだして、それをこわごわよけて通ったものだ。又途中の民家のそばには泉を利用し苔のいっぱい生えた池があり、大きな黒ゴイが泳いでいるのが見えた。水はきれいで通りがかりの人が飲めるように柄杓が立てかけてあり、疲れて帰る時などおいしい水を何杯も飲ませてもらった。

家の周りの畑では大根、白菜、しゃくし菜、ちしゃ、じゃがいも、さといも、等少しずつ種類をたくさん作っていたので、野菜類には不自由しなかったように思う。収穫した野菜は家のすぐ下の川できれいにあらって持ち帰ったら、そのまま料理出来た。川の水はそんなにきれいで、夏は泳ぎながらその水をのんだものだ。

周囲には田んぼや畑があったが、農薬を使うこともない。又汚い生活廃水が流れ込むわけでもないので、魚もたくさん泳いでおり、大小さまざまのハエが多かったし、川の底にはゴリ、ドンコ、うなぎなどが住んでいた。夏場はアユがこの辺りの山間部の小川まで上ってきて柳の木の下で何匹かが楕円形を描くように、スマートに泳いでおり何時も釣り針で引っ掛けようと試みるが、捕まえた記憶はない。捕まえられないのでよけい憧れの魚となった。それに比べてハエは青虫、クモ、バッタ、などをエサによく釣れた。人影を見せないようにそっと近づき竿を振ると面白いように大きなハエが釣れた。

魚釣りの記憶では、小学校へ入る前、橋の上から大きいのを何匹もつりあげたことがあ

る。子供の頃で、パンツにはだし、麦藁帽子の格好を思い出す。釣ったハエは持って帰り母に料理してもらって焼いてみんなで食べた。もう少し大きくなってからは、大人のやっているのを真似て竹ヒゴを作りその先に釣り針をつけて、ウナギをよく釣りに行った。太めのみみずをヒゴに通し、ウナギの住んでいる穴に差し込むと大きな引き込みがあり、右手でヒゴを引っ張り、左手でウナギを捕まえ、かごに放り込む。この技術が中々難しかったが、子供仲間では僕は上手な方で、時によると大人にも負けない釣果もあった。ウナギで忘れられないのが大ウナギを釣ったときのこと。

家の下の川(幅は五六メートル)に木の橋が架かっておりその下が丁度上流から流れてくる水が、石垣に突き当たる形で格好のウナギの棲家である。ある日いつものように、穴にヒゴを差し込むと、すばやく中に引き込まれ、ヒゴ(五十センチ位)が見えなくなった。これは大きなウナギだと胸ワクワク、対策を考え翌日普段の二倍、一メートル余りのヒゴを作り同じように差し込んだ。案の定大きな引きがあり、今度は慎重に手前に手繰り寄せ、左手で捕まえると指が回りきらない程の大きさに、籠にやっとならんと放り込むと早々に家に帰った。料理すると驚いたことに、昨日の釣り針がヒゴの一部と共に腹の中から出てきてびっくりした。これは普通のウナギの三倍もある大物で家族七人が自然の恩恵を満喫させてもらった。

一方この辺りは山がせり出している地形で、山には椎の木、なら、杉、檜など多くの種類の木が茂っており、中でも椎の木は大木で秋になると、その木の下は真っ黒い程実が落ちており、母に布で袋を縫ってもらい、大勢の子供たちと椎ひろいをしたものだ。拾った椎の実をフライパンでいって食べた。又小鳥をはじめキジ、やまどり、うさぎ、など色々の動物がたくさん住んでいたの、馬のシッポで作った小鳥用のワナを町から買ってきて大きな木の下にしかけツグミ、ヒヨなどをよくつかまえた。適当なスペースがあり、木の間から小鳥が見やすい場所を選んで仕掛ける。鳥は木々の間から地面の餌を探す習性がある。周囲の葉っぱを掻いて、周りに木の枝で囲いをし、中に小鳥の好物の木の实などを入れ、入り口にワナをセットする。学校から帰ると五六箇所ワナを見回りに行くのが楽しみで、薄暗い林の中へ一人で入り、奥山の怖さも忘れ胸をワクワクさせながら、もしや鳥がかかっているかと走りまわった。1日に何羽かの収穫があったので、持ち帰ると毛をむしり料理して焼いて塩をふりかけて食べた。今から考えると残酷の様だが、食糧難の当時は生きるためにやむをえなかったと思う。

子供も少し大きくなると、もう少し大きな獲物、きじ、やまどり、うさぎなどを狙うようになり、大人のやりかたを真似て針金のワナを仕掛け、時々やまどりをとってきた。鶏ほどの大きさにオスはきじの様に長いシッポを持っているので、ワナにかかったやまどりは見事で、最初に捕まえたときは、なにか夢心地だったように思う。これも持って帰ると先ず熱湯につけて毛をむしり取り、料理して塩をつけて焼くか、鳥鍋にして家で採れた野菜と共に夕食のご馳走になった。このように子供ながらに工夫して栄養補給につとめ6人兄弟みんな健康に育ち今日に至っている。

川の景色、山の景色どちらを見ても大自然そのまま、きれいな水と空気に恵まれ今日の川の汚染、排気ガスで空気の汚れなど当時では想像も出来ないことであった。2月になると家の周囲の梅に、いっせいに白い花が咲きウグイスやメジロが群がってミツを吸い、とてもスガスガイ気持ちになった。

これら梅、柿、栗の他に家の周りの小さな段々畑の岸にはお茶の木がかならず植えてあり、5月の茶摘時は1年中で割合大きなイベントの1つとなった。近所の家から何人か手伝いに来てもらい、娘さんからおばさん、みんな日よけのかさをかぶりお茶の木の枝を1本1本手でしごいて摘み取り、籠に一杯になると家の庭に敷いたムシロにうつしておいてまた摘み取る。こうして小山に積み上げたお茶の葉を、庭の隅に作った特製の籠に架かる大きな鍋に放り込む。強火にして大きなシャモジでまぜるうち、大量の葉っぱは小さくなり、これをムシロに広げて手で揉む。この作業を繰り返して天日に干して仕上がりとなる。作業中はそこら辺り5月の陽気とむせかえるようなお茶の匂いで一杯になり、深呼吸すると、体のすみずみまで香りが沁み渡り、自然から力をもたらしたような気分になる。

お茶摘みが終わると6月の梅雨、裏の梅もいつの間にか大きくなりぶんごうめと言う種類の太粒である。時々生のままで、かじってみてもすっぱくておいしくもなく、歯にしみたことを思い出す。収穫期には子供たち総出で、木に登って手でちぎったり竹ざおで叩き落したりして収穫した。四五本の木から沢山の梅の実がとれ、母が大きなツボに塩漬けにして梅干をつくり、夏ばてよけに利用した。僕は胃腸が弱かったので、おかゆとこの梅干で食事をした。又家々にはグイミ（ぐみ）の木が植えてあり、この時期赤く熟れた実を弁当箱に入れ蓋をまぶしてよく食べた。食べ過ぎて腹をこわすこともあった。

このように身近で自然の食べ物には事欠かないが、この季節忘れられないものがある。それは童謡にもある桑の実である。この頃田舎の各家では、沢山のカイコを飼っており、そのため広い桑畑があちこちにあり、畑へ入ると大人でも見えなくなるくらい大きな木になる。梅雨の頃になると、この桑の木に大人の親指大の実がいっぱいなり赤黒く熟してくる。この桑の実が甘酸っぱい味ですごくおいしい。子供たちは桑畑に入り黒く熟れた実を選び、長いこと食べるのに夢中になる。畑から出てくると、みんな口の周りが真っ黒になっており、実を食べたこと一目瞭然である。この光景は猿の子どもそっくりである。

初夏のこの頃、夕方になると子供がビーセンと呼ぶ小さな昆虫が空一杯に飛ぶ時があり、ホタルの出る前の出来事である。竹の笹で競って叩き落して捕まえた。珍しいものでも貴重なものでもないが、空一面に群がった昆虫を叩き落すスリルを味わったものだ。どんどん暗くなるにつれ、川沿いにホタルが文字通り乱舞し何千というホタルが飛び交う。場所を移動するためスイスイと川筋に沿って飛んでいく。子供たちは「ほ、ほ、ほ一たる来い。あっちの水は一がいぞ。こっちの水はあーまいぞ。ほ、ほ、ほ一たる来い」と節をつけて歌いながらホタルを呼ぶ。これを聞いて飛んでくるわけでもないが、とにかく大群が頭の上を掠めていく。みんなは橋の上で待ち伏せ竹の笹にからめて捕まえ、ネブカ（大型のネバネバの虫）の中へ入れて、弟や妹たちに持って帰らせた。今日の様な虫かごも当時はなかった。こ

んなホタルの乱舞を今の子供たちが見たらどんなにか驚くことだろう。

夏は家の下を流れる川でよく泳いだ。小学校から帰るとカバンを家に放り込み、すぐ下の川へ直行、干し場と称するちょっとした広場に、服を脱ぎ捨ててドブンと飛び込む。汗まみれの体に心地よい感触、山あいの川なので水温も低く、長時間泳いでいると唇が青くなり、子供同士で注意しながら家に帰った。時々泳いでいる最中に、上級生が来て僕たち低学年を深みに放り込んで楽しんでた。こちらは怖い思いをしたがこれが泳ぎが上手になっていくのに大いに役立った。お陰で中学生くらいになると海に出かけ、狭い湾の入り口約五六百メートルを泳いで往復することも出来た。又海へ泳ぎに行ったついでに磯で貝取りもした。水中めがねをつけ2メートルぐらい潜ると、さざえ、あわびがあちこちに見つかる。手に持ったかすがいで岩から引き離し捕まえる。捕まえては網の袋へ入れた。重たいほど取れたいろいろの貝を担いで家に持って帰った。

盆と正月と言う言葉がある。田舎でお盆というとは3日間農作業をせずに休養する慣わしになっており、多少のご馳走をつくり子供たちも勉強せず、遠慮せずに遊べる時である。夕方になると家々に松明に火を灯し亡き人の魂を迎える。前もって山から松の根を掘り出し乾燥させて適当な大きさに割り、それを束ねて竹の先に吊るす。火をつけると松の根の油が良く燃えて、大きなかがり火となり1時間ほど燃え続ける。盆の三が日が終わると子供たちは、松明の残り木を集めて庭にカマドを作りそれで盆飯を炊いて食べる。子供には結構楽しい行事の一つであった。

盆を過ぎると夏休みも終わりに近づき、大急ぎで夏休みの宿題をすることになる。現在なら昆虫の標本を作ったり、自然の観察記を作ったりするが、当時は自然の中にどっぷり浸かっているので、かげえ（陰絵）と言う一冊のワークブックに天気とか日記を記入し、漢字の書き取りや算数の練習問題をやるのが主な宿題であった。二学期が始まるので大いに勉強しようと言うよりは、又学校か、しんどいなあと言う気持ちと友達に久しぶりに会える楽しみとが相半ばしていた。

二学期は秋の行事が沢山ある。農家の取り入れが一段落した頃小学校の大運動会である。田舎、加茂村の小学校なので生徒数も高等科を入れて300人位であるが、他に娯楽のない村では小学校の運動会がとても楽しみである。母は前の晩遅くまで巻き寿司を作ったり、玉子焼きを作ったり、又栗をゆで、椎の実をいって準備してくれている。朝、子供たちは先に学校へ出かけ、母が後から風呂敷いっぱいに入れて持ってきて応援席に座っている。競技は各学年の100メートル走とリレー競争が大半を占める。僕は走りが苦手で四五人のグループで走るのだが、あとを振り向くと大抵1人しかいない。家に帰ると「お父さんは走りの選手だった。頑張れ」とよく言われたものだ。確かに学校の玄関を入ったところに父が若い頃県下で優勝した写真が飾ってあった。

ひとしきり競技が進むとお昼である。子供たちも父兄のいる応援席へ行って一緒にご馳走を食べる。運動したあとなので母の巻き寿司や玉子焼きがおいしい。

午後の競技も低学年のお遊戯、父兄の走り、来年入学する子供のかけっこなどを最後に3時ごろには終わる。閉会式では運動会の歌を全員で歌い、その後校長先生が壇上からみんなよくがんばったとほめ言葉で結び、ノートや鉛筆が賞品として各学年単位でまとめてもらい、後で各人に配ってくれる。応援席の椅子やごごの後片付けをし、稲穂のたれた田んぼ道を秋風に吹かれながら家へ帰った。

その後村民大運動会やら秋祭りなど秋の行事が続く。秋祭りは村の各部落単位にある氏神様を中心にして、それぞれ日をずらして行われる。暑い夏の労働から解放されて取り入れも終わり、心も豊かになった頃氏神様に豊作のお礼祭りをする。神事は部落の神主さん（大抵の部落に農業兼業の神官が何人かいる。）がお祓いをし、祝詞をあげた後全員が神社の庭に出て太鼓を打ち鳴らしながら歌を歌ってぐるぐる廻る。各家では1年中で最も豪華なご馳走を作り、近所の人々や他の村から親戚を招いて盛大に酒宴を張る。家によっては何日も続かるところもある。

やがて秋も過ぎお正月ともなると雪がよく降り大抵五六センチは積もる。子供たちは孟宗竹を割ってスキーを作り坂道でよく滑った。年下の小さい子供たちの分も作ってやり、仲良く滑った。にわか作りのスキーではあるが本物に劣らず楽しく滑れた。又雪だるまを作ったり、学校では雪合戦をやって楽しんだ。冬は子供なりに工夫していろいろの遊びをしたが、それほど寒さは感じなかった様に思う。

年が変わり1月1日には子供は全員登校し、元旦の式がある。「年の初めのためしとて……」と新年の歌を歌い、校長先生や来賓のお話を聞いて家に帰る。

子供の頃は正月と言うと旧正で祝う慣わしになっていたのだから2月はじめごろになると旧正月のための餅を搗く。各家には臼と杵、又米を搗く大型のダイガラと言う石臼がありそこで餅を搗いた。あんこの丸餅、角餅、又赤や青海苔の入った餅など随分種類も多く作ったものだ。子供たちは母親が丸める一方でちょっと失敬してつまみ食いをし、叱られた思い出など懐かしい。

今振り返ってみて子供の頃の生活は物の無い時代ではあったが、それなりに工夫して生活を楽しみ、もっと広く、もっと深く長い歴史の中で培ってきた良き習慣も交え手ごたえのある日常であったとおもう。みんなもっと真剣に人生を生きていたのではなかったらうか。

おわり

平成14年3月2日 記

僕たちの小学校時代

高知県高岡郡加茂村立加茂尋常高等小学校。これが僕達の小学校である。村のほぼ中央に小高い丘があり、その丘の上に、木造平屋建ての校舎が3棟。校門を入れて南側から北へ順番に並んでいる。田んぼ道を通り「ランカン橋」(低い手すりのついた20メートルほどの橋。僕達はそう呼んでいた。)を渡るとその部落の氏神様があり、その横を通って村役場へ出る。役場のそばの石段を登ると、小学校の校庭に出る。丘の上にしてはそこそこの広さもあり、秋の運動会や色々の行事が出来る広さがある。

入り口の校門には、両側に高さ2メートルあまりの御影石の柱が立っており、一応の整好がついている。校庭の周囲には木の柵があり、あちらこちらに大きな赤松が空に向かって伸びている。校庭からすぐの校舎には南に面した表玄関があり、来客用の下駄箱などが置いてある。顔を上げると陸上選手五六人の写真が飾ってある。高岡郡の代表で県大会へ出たときのものらしい。その中に僕の父も入っていた。僕は学校でのかけっこは、いつもピリカピリカから2番目ぐらいで、家に帰ると父から玄関の写真を見てみるとよく言われた。

玄関を入ると2階へ通じる階段があり職員室へ上がる。僕が時々いたずらをして、先生に引っ張っていかれるところである。左右の廊下を通ればそれぞれの教室にいけるようになっており、大抵低学年が入っていた。渡り廊下を通して2つ目の校舎へ行くと、34年生が入っており教室間の間仕切りを取ると講堂に早変わりした。

元旦、紀元節、卒業式、入学式、天長節、明治節などの行事に使用した。

さらに渡り廊下を進むと、3つ目の校舎に行き着く。ここは高学年、高等科の生徒が専らしており、低学年のうちはこの校舎まで行くことはまずなかった。それぞれの校舎は多分明治時代の建物と思われ、傷みが激しく、雨でも降ると各校舎とも雨漏りがするので、あちこちにバケツを置いていた。真ん中の校舎の脇には用務員の事務所兼居宅があり、小さな武庫がつるしてあった。始業、各授業時間の区切り、終業の合図はすべてこの鐘を鳴らして知らせたが、結構上等の鐘なのか、3つの校舎全部に響き渡るほどの威力があった。この鐘を鳴らしたり、昼食時のお茶を沸かししたりするのが用務員(番人さんと呼んでいた)の仕事。その横に手洗いがあって、蛇口が20箇所ぐらいついており、生徒が手を洗った後、水を飲んだり出来るようになっていた。各校舎の間には便所があり、渡り廊下から行けるようになっていた。各学年1クラスで全校生徒300人ぐらいだったと思う。

この学校に僕は昭和12年に入学した。1月生まれのため、その前年生まれの子供たちと同学年である。当時、この村には幼稚園が無かったので、いきなり小学校入学である。入学式の直前は、母親が枕元に明日着る洋服と帽子、黒の鞆などを置いてくれ、朝は少し寝ぼけて母親に連れられ、歩いて学校に向かった。田舎道を三十分歩いて学校へ。校庭では先生が思い思いに遊んでおり、その片隅に新入生の親子連れが、入学式を待ってい

た。父親は帽子をかぶり母親はよそ行きの着物姿である。

入学式は真ん中の校舎の3教室の間仕切りを取って講堂代わりとし、前のほうに新入生が並び、その後ろに順次在学生在が席につく。片一方のひな壇には村長さん、駐在さん、村の顔役など四五人が顔を並べ、反対側には校長先生、教頭先生他先生方が席についていた。先生の半分くらいは若い女の先生である。

最初に校長先生のお話、続いて来賓の村長さん、村の顔役（村の金持ちで、かつて村長や豪商など）の挨拶が終わると、1年生は玄関に最も近い前列の校舎の教室に入る。あらかじめ決められた順序を、担任の先生が指示しながら席に着かせる。1つの机に2人ずつ男女の組み合わせにしてあった。この頃は男女7歳にして席を同じゅうせずの原則は無かった。やさしい若い女の先生から学校の決まりや、勉強する心構えなどわかりやすく説明した後、便所や手洗い場の位置などその場へ連れて行って教えてくれる。勉強は明日からなので、親と一緒にそれぞれの部落ごとに一団となって帰る。僕たちの部落からは10人ほどの新入生である。

翌日は友達同士誘い合って登校し決められた席に着く。先生の指示で持ち物をカバンから出し、机の上に並べてチェックする。教科書、ノート、筆箱、鉛筆、消しゴム。一応確認が終わったところで授業が始まる。

先生が名前を覚えるため再度、順番に名前が呼ばれる。男の子はx x君、女の子はx xさん。呼ばれた生徒も大きなはっきりした声で「はい」と答える。机の上には真新しい教科書が並んでいる。小学読本、算数、修身などの教科書があり国語（読み方）から始まる。

記憶にある文章は

小学読本 サイタサイタ、サクラガサイタ
コイコイシロコイ
メダカサン、メダカサン オオゼイヨツテナンノソウダン
キグチコヘイハイサマシク、シンデモクチカララップアハナシマセンデシ
タ

などが思い出される。

文字通りピカピカの一年生として、先生の言うことを聞き漏らすまいと一生懸命になっていた。

字が書けるにつれて雰囲気にもなれ、ある意味では落ち着きが出来て自分のしたいことへ手が伸びるようになる。又短気な一面もそろそろ出始め、友達とも喧嘩する。当時低学年では学校のすぐ近くで資産家の女学校を出たばかりのT先生が担任であった。僕はすぐ隣の教室をするので、2人を隣の空いた教室に閉じ込められたことがある。そこで又2人は喧嘩する。誰にも見られていないと思っていたら、先生が間仕切りの節穴からのぞいていて机のふちで間仕切りをパンパン叩く。2人はびっくりしてやめる。又教室で目に余ると先生が扉下へ引っ張り出そうとする。こちらは出されまいと机にしがみつく。手に余った

女の先生は、農業担当の男の先生を呼んでくる。W先生である。男の先生だとひとたまりもない。引きずられて2階の職員室の隅に立たされ、タバコくさい手で何度も平手打ちを食らったこともある。今でもあのタバコくさい手の感覚がよみがえる。殴られたからといって、特別反省もしないし恨みもしない。したがって気軽にいたずらをして、よく職員室へ引っ張っていかれた。ただ困ったことは、弟たちが早く家に帰り、兄貴は今日も職員室に立たされていたと親に告げ口されて、こっぴどく怒られることしばしばであった。

小学校では毎年一回学校で学芸会をやる。又急ごしらえの講堂を作り舞台を作って、劇に幕を張り感じを出す。現在の生活発表会かと思う。大勢の父兄の前で、普段習っている歌を歌ったり、練習してきた劇を発表する。曾我兄弟、太郎冠者など時代物が多く出ると、戦中とはいえ、あまり兵隊さんの劇はやらなかったように思う。配役を先生が割り振るときは、ドキドキしながら聞く。良い役が当たると心の中でしめたと思うが、周囲があるのでわざと嬉しそうな顔はしない。発表までに一ヶ月ぐらい練習したろうか。中には途中でセリフを忘れ、先生が幕の裏側から小声で教えてくれる。ある年曾我兄弟の劇でリーダーの役がまわってきた。何度も何度も練習をして自信もついてきた。当日の昼休み、教室でふざけている間に、頭に怪我をさせられ、出血しだした。急いで保健室で先生に白い包帯を巻いてもらい、そのまま出演した。無事役を終えほっとした記憶がある。

学校とは別に父兄が主催する各部落ごとの学芸会もやっていた。村内を5つの部落に分けて、いろいろの催しや連絡など、部落単位でやっていた。僕たちの部落では資産家で、フスマを取り外して、部屋を大きく出来る家を選び、仮設の舞台を作り50人ぐらいの父兄を前に学校の国語読本の朗読、唱歌、簡単な芝居などやったが、中でもおじいさん、おばあさんが孫のために衣装を作り、センス、からかさなど小道具もそろえて、おどりを披露するのに熱心で、大きな拍手をもらっていた。「雨降りお月さん」「私の人形」等演目も多量であった。

家から学校までは子供の足で約40分、学校への行き帰りにも苦勞したことが懐かしく思い出される。低学年の頃は上級生に守られて登校。特に台風のときは大変であった。当時津島市は台風が必ず通過する地区で、又雨の降りようも、粒の大きい雨が話し声が聞こえるくらい音を立てて降る。今のような舗装道路ではなく、国道でも砂利道のため、強風と雨で砂粒が飛んでくる。姿勢を低くして這うように進むが、顔に容赦なく砂粒が当たるので痛い。我慢しながらやっと学校近くに来ると、橋を渡らなければならない。ランカ川である。30センチそこそこの申し訳の欄干(手すり)がついている。かぜに飛ばさずおどろかずに、これにしがみついて渡る。橋の下は増水した濁流が流れ、足がすくむ。橋を渡る時人ごみの横を通るので、風当たりは弱くなる。坂道を登ればすぐ学校。みんなやっとならぬ思いで学校にたどり着く。びしょぬれの衣服をしばり、それを着て教室に入る。一年に数回もいるが殆ど登校している。毎年1~2回はこんな経験をする。幸いなことに途中で怪我をしたり、川へ落ちたりの事故は聞いたことが無かった。それに耐えるだけの訓練がはじまるころから自然に出来ていたのである。

又学校への道々、四季を通じて楽しいことが多く、学校へ行くのがつらいと思ったことは一度も無かった。春、道の両側の田んぼは一面のレンゲ。その中に寝そべると、体が全部埋まってしまう。友達同士でゴロゴロ転がったり、川で餌をついばむあひるの群れに手をあげて脅したりした。夏は溝の中や、ため池でフナやドジョウを捕まえたり、田んぼへ入ってワルサをするので、罰でたくさんのヒルが吸い付き引き剥がすのに苦労した。

このようにして田舎の小学校なりに、中身の濃い教育が受けられたと思う。戦時のこととて特に心の教育には熱心で、教育勅語や修身では、君に忠、親に孝、兄弟仲よく、友達とは信頼関係を築けと教えられた。今から思えば行き過ぎの面もあったかもしれないが、人間の本質を陶冶する教育は、子供にとって有効であったと思う。「君に忠」は子供心にそんなに現実味は無かったが、親には心配をかけないように、大きくなったら親孝行できるような心がけだ。兄弟は仲良く助け合って暮らす。6人兄弟の長男としては、人一倍そんな気持ちになった。友達とはよく喧嘩もしたが、陰湿さはまったくなく、喧嘩が終われば又元どりの仲良しになり、いじめのような光景は、あまり目にしなかった。

戦時色も益々厳しくなりやがて第2次世界大戦が始まる頃は、小学校も高学年に進んでいた。戦地での兵隊さんの苦労をしのび、教室も厳しさを増していった。毎朝耐寒訓練と称して、真冬の校庭にパンツ1つで、はだしになり校庭を何周か走らされたり、又学校のきまりが守れなかった場合は、廊下に何時間も正座させられたりした。緊張していたのか風邪を引いたり、具合が悪くなる子もあまり見られなかったように思う。

やがて小学校も6年生になり、卒業を控えて修学旅行となる。僕たちの小学校は例年伊勢、志摩、奈良、京都へのコースが決まっておき、今回はどうなるかなと思っていると、例年どおり実施と決まった。事前に先生から旅先の歴史や交通の状況など詳しく説明があった。僕たち殆どの生徒は、高知市の都会をたまに見るくらいで、それ以上遠いところへ行ったことが無いのである。いきなり大都会へ行くと今風に言う、カルチャーショックを全部受けても困るので、学校では何回かに分けて説明会を開いた。先ず交通機関のこと。高知では鉄道も単線で、時々汽車が通るが、本線へ行くと複線で、ひっきりなしに長い列車が走り、すれ違うときはものすごい音がすること。奈良や京都は教科書でも習ったように歴史の古い街であること。伊勢は天照大神を祭った皇大神宮がある。話を聞いていると、海外の世界へ誘われる興奮を覚えたものである。

修学旅行前夜は、母親が遅くまで弁当やおやつを色々を作ってくれた。寿司や赤飯のはじめをどっさり作り、出発当日はこれにみかんや持参する米をそれぞれ袋に入れて駅まで歩いて持ってきてくれた。米は宿泊する旅館に差し出すものである。

乗車出発の汽車に乗り、高松棧橋駅で連絡線に乗り換える頃にはあたりはもう真っ暗になっていた。はじめて四国を離れるので、デッキに出て、はなれ行く四国の山々を、友達同士で眺めていた。連絡船の黒い煙が、夜の海上へたなびき異様な感じに包まれた。1時間ほど乗った船内のあちこちをぶらついていると、宇野棧橋到着である。山陽本線になる。この1つの間にか機関車も今までに見たことも無い大型になり、又スピードが全然違う。

先生が事前に説明してくれた通りで、猛スピードで走っている。うつらうつらするうち大きな駅に着いた。ホームがいっぱいあり電灯がこうこうと点っている。駅員の「おおさか、おおさか」と呼ぶ声でこれが授業で習った水の都、煙の都の大都会、大阪かと思った。大阪を出て小1時間もすると、僕たちの降りる京都駅についた。

京都では京都御所、金閣寺、銀閣寺、清水寺などを見学した。初めて見る京都で田舎の小学生はあっちへうろうろ、こっちへきょろきょろ、引率の先生がさぞでこずったことと思う。それでも国宝とか重要文化財の説明を熱心に聞き入ったので、昨夜来の疲れもまったく感じない京都見物となった。

京都からは伊勢へ向かって電車に乗った。夕方になり、さすがに睡眠不足の疲れがでて、みんな電車の中ではこっくりこっくりになった。夜遅く伊勢に着き、やっと布団で眠れる旅館に着いた。食事のあと旅館のおみやげ物売り場などぶらぶらして床についた。眠り込んでいるところへ、急に何か布団のうえに倒れこんでくるものがあり、よく見ると先生が酔っ払ってよろけながら向こうへ行くのが見えた。結構痛かったが何にも言えずそのうちに眠ってしまった。

翌日は最後の訪問地奈良へ向かった。法隆寺、東大寺、猿沢の池、若草山などを見学した。東大寺の大仏の大きいのには度肝を抜かれた。先生の指示で何人かが大仏の下の柱に作られた穴をくぐりに行った。とても小さい穴が簡単にくぐれて一同びっくり仰天した。それほど大仏が大きいと言うことである。奈良公園では、みんな珍しい鹿の群れに手を差し伸べて餌をやったり、頭を撫でたり動物に慣れている田舎の子もおおはしゃぎした。荷物をそこらへ置いて鹿と遊んでいた時、まだ残っていた赤飯やおにぎりに鹿が気づき荷物をあけて食べるころであった。大急ぎでそれを取り返した。

ぼつぼつ旅も終わりに近づき、疲れも出てくる頃になった。奈良から大阪へ出て夜行列車に乗り継いで岡山から宇野へ。夜中の連絡船で高松へ着いた。高松でしばらく休憩の後、早朝の列車に乗り込み昼過ぎ加茂駅に着いた。出発時、母は息子の初めての修学旅行に、あれもこれもと思い、荷物が多くなっていたので、帰り着いたときまだ一部残り物がありびっくりした。

修学旅行も終わると授業も最後の追い込み。高等科へ進むもの、中学（旧制）へ進学する者、それぞれの準備やら入試対策に忙しくなった。年を越すと中学の入学試験があり、今年で4人が受験した。2人合格であるの2人は高等科へ行きながら再挑戦することになり、6学年の授業もほぼ終わった。幸い僕は合格して春から中学生になる。今6年間を振り返ってみて、子供並みに感慨がこみ上げて来る。

このように多感な子供の頃の6年間は随分と長く感じたし、色々な経験をし、これが随分と生きついている。懐かしい限りである。

最後の締めくくりで卒業式。例のごとく3つの教室の間仕切りを外し、舞台を造って演劇に幕を引き、会場らしくした。例によって村の顔役が来賓席につく。校長先生から6年間の精進にねぎらいの言葉。戦局が厳しくなっているので、どの道に進むにしても、お

国のために一生懸命努力すること、などの挨拶があり続いて卒業証書授与。代表が一括して受け取る。次に来賓が次々に卒業後も引き続きよく勉強して、加茂村の発展のために頑張るようにとのお言葉をいただく。最後に卒業式の歌を先生のオルガンに合わせて歌う。「御ねば尊しわが師の恩、教えの庭にも早幾年……」。この頃になるとさすが6年間ともに過ごしてきた先生、友達とも別れていく寂しさがこみ上げてきて涙ぐみ、中には涙声になり顔に手を当てる子も現れる。今までに何度も卒業式は経験してきたが小学校の卒業式が最も感動したように思う。

平成17年10月

加納 時春

賢い犬

小学校低学年の頃のこと。山あいの自宅から小学校まで、国道ではあるが、まだ舗装もされていないジャリ道を三十分ほどかけて、歩いて通った。

途中樟脳を作る小さな工場があって、みんなは樟脳屋と呼んでいた。

ここに一匹の賢い犬を飼っており、いつも退屈とみえて工場から出て、道路端におとなしく座り子供たちの通学をじっと見ていた。学校へは四五人の友達と行くので、行き帰りにその犬に石を投げたり、暴言を吐いたり、いわゆる高知弁で「おこつり」ながら傍を通った。その犬は何食わぬ顔で平然と座っていた。

ある朝少し遅れて一人で学校へ行くことになり、いつものように道端にいる犬の前をコワゴフ通り、しばらく歩いて振り向くと犬が黙ってついてきているのではないかと。僕はびっくり仰天、急ぎ足になった途端、後から突然足のふくらはぎに噛み付いた。心臓が止まるほどびっくりし、泣きながら走った。

後でこわごわ触ってみると、歯型がつく程度の噛み方で傷にはなっていなかった。

犬も心得たもので、臆病な子供には怪我をさせない配慮があったのだろう。賢い犬である。それ以来僕は犬にいたずらするのをやめた。

おわり

平成14年2月19日 記

どじょう捕り

暑い夏になるといつも高知県での子供のころを思い出す。

僕たち加茂村の小学校は家から歩いて約40分。山あいの国道をしばらく歩くと、やがて広々とした平野に出る。この広さは僕たち山奥の子供の感覚であるので、一般には通用しないかもしれない。家を出て途中樟脳屋を過ぎると一面の田んぼが見渡せ、向こうの山すそを鉄道が走っている。ときどき蒸気機関車が二、三両の客車を引っ張って、黒い煙を吐きながら大きな汽笛を鳴らして通るのが見える。

当時の国道は砂利道。トラックが時々通るので、道路にはあちこち穴ぼこが出来ており歩くのに注意しないと足をとられる。自然と道路の端を歩くようになる。30分ほど歩くと避病院がありここから国道を離れて田んぼへ降りていく。避病院といってもふだんは誰もいない。隔離しないといけないような伝染病患者が出ると、ここへ連れてこられる。身内の人が通いで世話をし、お医者さんが時々診察に来る。怖いところであるがここに人が入っていることは滅多に無い。一度岩目地部落のおじいさんが天然痘に罹りここに入っていたことがある。全快して家に帰ったのを覚えている。

田んぼ道へ入ると両側に4、50センチ幅の小さな溝があり水がゆっくり流れている。その中にメダカ、ふな、ゲンゴロウ、ミズスマシ、おたまじゃくしなどに混じって、どじょうがたくさん遊んでいる。溝の中にもいるし、みると田んぼの中にもいっぱい泳いでいる。中には親指ほどの大きなのがいて捕まえてやろうと身構えるが、なかなかすばしこいので手に負えない。そのうち学校の時間が気になり帰りに捕まえることにする。

授業がやっと終わって帰り道、朝見たどじょうを探して捕まえようと道を急ぐ。同じ学年は男2人、女5人で一緒に帰るが、いつの間にか男2人になっている。荷物を畦道に置き、そりを脱いで溝へ入る。暑い昼過ぎ、水はぬるま湯になっているが、流れのあるところはひんやりしていて気持ちがいい。

田んぼに草取りに来ている大人に「道草食わんと、はよう家に帰れ」と言われるがお構いなし。溝には今朝見たどじょうの大物は見当たらず小さいのが逃げ回っている。ときどきメダカに混じって小鮒もいる。相棒と溝に入り上と下に分かれ手で通せんぼをし、次第に距離を縮めていく。時に足で水草の中もかき混ぜてみる。相棒との距離が接近した頃、溝の隅を見ると大物が見えた。相棒も「うわー、大きい」と歓声をあげる。わくわくしながらそーっと包囲網を狭めていく。大物は体長15センチはあろうか。大きな2本のひげも見える。そっと、そっと近づいていって捕まえる寸前隙間から素早く逃げられた。大物は何でもそう簡単には捕まらない。たいした貫禄だと感心する。小さいどじょうはたくさんいるけど興味が無いので追いかけるのをやめて帰ることにする。どじょうとの戦いが終わって、よく見ると両足に何匹もヒルが吸い付いている。無理やり引き離すと赤い血が流れ出す。

ヒルは腹いっぱい血を吸ってまるまる太っている。傷口に付近のヨモギの葉を手でもんで、その汁をたらすとたちまちのうちに血は止まる。がまの油より早く確実に止血できる。

そのうち夏が過ぎ秋風が吹き始めると稲が実り色づいてくる。田んぼの水はいつの間にか空っぽになり所々ひび割れが見える。いつも夏場水をいっぱいためている池も今は水はなく泥んこだけとなっている。学校の帰りもしやと思いその池に入って手で泥を起こしてみる。いるわ、いるわ、どじょうが塊になって寝ている。何十匹、何百匹という数である。大抵ちいさいのやら中ぐらいのが多いが、手を泥に入れて探すうち大きな手ごたえを感じる。例の大物である。水がないので簡単に捕まえられる。よくみると大きいのは一匹だけではない。あちこち探すうち五、六匹も捕まえた。夏の盛りのような元気はない。観念しきったようすである。これらどじょうの親玉のような連中は、この泥の中で冬を越し、また来年夏になるとあの溝で大物ぶりを発揮するのである。今ちょうど眠りについたところである。寝入りばなを起こされて寝ぼけているのかもしれない。かわいそうなことをしたと思い、又泥の中へ全部埋めてやった。

来年また溝で勝負するぜ。

おわり

平成 14 年 7 月 記

怖い話

僕は高知県でもかなり山奥の田舎で生まれ、毎日大自然に囲まれて育ってきた。この田舎には迷信も含めて恐ろしい話がいくらでもある。一番怖いのはやはり人間の死で、当時田舎では人が死ぬと土葬をしていたので、山の墓にはあちこちに新しい仏さんがあり、葬式のあとの幟や、色々のお供え物が新しく供えられているので直ぐ分かる。

葬式に行つて自転車で夜帰る時山道で、牛ほどの大きな犬がついて来た。帰る道中ずっと鈴の音がした。どこかに火玉（人魂）が出た。又変わった話ではこの辺は小さな川があるが、そこ此処に深い淵がありエンコウ（かっぱ）が住んでいる。子供が一人で泳ぎに行くと淵の中へ引きずり込まれる。馬が引きずり込まれた事もあるなど。

馬がまと言つて道を歩いていて、一寸躓いただけで大きな怪我をしたと言つた話。小学校の近くに高い山があり、夜な夜なその山にタヌキが大勢出て、チョウチン行列をしているのを遠くから見たという話。田舎にはこんな話は尽きない。

子供の頃からこんな怖いことに慣らして、腹の据わつた人間に成長するよう大人たちからも、子供仲間でもよく肝試しと言つたのをやった。夜子供たちが集まって山の上の墓へ入つて行く。悪戯っ子が途中で物を投げたり、マッチをすつてその火を投げたり、びっくりさせるようなことをする。山あいの部落なので当時街灯も無く何処を向いても真っ暗である。その山道を一人で歩いてもとの所へ帰ってくる。小さい子は怖がつてよく泣く者もいる。小学校三四年の頃のことである。

小学校へ行く途中に避病院（伝染病患者を隔離するところで普段は誰も居ない）がありその上に大きな寂しい森がある。遠くから見ると森の中の椎の大木に白いチョウチンのようなものがぶら下がっている。誰からとも無く狸のチョウチンだと言つたことになった。長いこと皆それを信じていたが、あるとき学校の帰りに高等科のお兄さんが、ほんとにそうか確かめてくると言い出した。そのお兄さんは一人で深い山の中へ入つて行った。低学年の僕たちも後からこわごわついて行った。暫く行くと大きな椎の木の枝に直径1メートルほどの白いものがぶら下がっており、チョウチンと同じ丸い形をしたものが見えた。お兄さんは木に登つてそれを取りに行つた。暫くすると大きな白いものをぶら下げて降りてきた。重さがあるなあと感心した。よく見るとスズメバチの古い巣である。皆拍子抜けした。

これは実際にあつた怖い話である。小学校6年生のとき近所のお兄さん達に誘われて隣の町へ活動写真を見に行つた。活動写真の小屋は隣町にしか無いので友達同士で時々見に行つてゐた。その時は皆高等科を卒業した青年ばかりで子供は僕だけだった。活動写真が撮つて青年たちは揃つて娘さんの家へ遊びに行く（これを僕たちは夜這いと言つていた）ついでに、おんし（お前）は一人で帰つちよれと言われてぎよつとした。これは困つた。家

までの帰り道は山道を歩いて約1時間。民家のあるのは初めのうち少しだけ。その先は電線も何も無い真っ暗闇。当時自動車もめったに通らない。途中峠へ差し掛かるまで人の墓、牛馬の骨を埋めたところがあちこちにある。この町には屠殺場があり不要になった物を山へ埋めていた。時々それらの燐が燃えて火玉が飛ぶところである。

意を決して下駄を手に持ちハダシで走った。真っ暗闇でも道路はじゃり道なので少し白っぽく、なんとなく分かる。墓の横を通りながら火玉が出るのではないか、お化けが後からついてきていないかと思うが、後をよう見ない。やっと峠まで来るとそこからが更に難所。引き続き国道を走れば、道を外れることもないが、随分遠回りになり、途中事故で人が死んだところや、首つりをしたところがある。峠から近道（旧道と呼んでいた）を走れば距離は短いが、鬱蒼とした杉林の中の石ころだらけの小道。人家までは40分位かかり、その間明かりは全く見えない。怖いが早く家に着きたい。近道を行こう。峠を手探りで走り降りた。道の切り取りの石に当たったり、木にぶつかったり必死だ。やがて杉林の中へ入ると全く何も見えない。杉の大木の林である。方向がわからない。普段、昼間通っている箇所を頼りに、ここらあたりと思うところを、石ころ道から外れないように注意して歩いた。何か怖いものが出そうで仕方が無い。後から何かついて来ているような気もするが真っ直ぐ前方を見て足早に歩く。暫く行くと出た。ほんとうに出た。思わず叫び声が出た。真っ暗闇の行く手に、異様に光る物体が2個。もう後へさがるわけにはいかない。とにかく逃げ、身も心も凍るとはこのことか。いやがる体をむりやり前進させる。光る物体は道の方向から杉林とおぼしき方向へ移動した。体が震えるどころの話ではない。早く逃げよう一心。石ころの感触を頼りに兎に角走った。しばらく夢中で走り光る物体が見えなくなり、少し落ち着いたところで大きく息をした。そしてあれは一体何だったのかと考えた。あれは山猫か狸など動物の目だったと気がついた。まだまだ体に染み込んだ恐怖は覚めないので走り続けた。

やっと杉林を過ぎ開けた場所に出た。道らしきものも見え少し走りやすくなった。両側には民家らしい。それから5分ほど走るとやっと最初の民家の明かりが見えた。助かった。息を吐いた。走るのをやめて歩き出した。歩きながらさっきの杉林の方を見た。何事も無い。だんだん気持も落ち着き、やっとのことで家にたどり着いた。

お化けなんて思わない。結局この世の中にはお化けのような怖いものはいない。一番怖いのは心の中にある。

おわり

平成15年1月 記

メジロ

冬になるとこの近くの公園にメジロの群れが毎日来る。樺の蜜を吸ったり、集団で「ティーティー」と鳴きながら木から木へ移っていく。目の縁が白いのでメジロと言うらしい。

子供の頃、高知県の田舎では殆ど家ごとに子供も大人もメジロを飼っていた。小鳥を入れるかごをコバンと言う。このコバンも結構自分達で作って楽しんでた。底の板を適当な大きさに切り、竹ヒゴを作って組み立てていく。そんなに難しい技術ではなかったように思う。止まり木は家の周りにある南天の木を切って作った。表面がザラザラしているので、小鳥が止まりやすいと見たからだろう。小さな焼き物の容器に水と餌をそれぞれ1日に1回やっていた。餌は蒸したサツマイモとほうれんそうを一緒にすりつぶしてどろどろにしたものだ。メジロもこれがご馳走と見えて、いつも喜んで食べていた。時間の無いときは、サツマイモを丸のままコバンの外から貼り付けるようにして、それを中から小鳥がつついて食べていた。

メジロは時には高い木の梢に止まって長いことさえずる事がある。子供達はそれを「ハル」と言ってお互い自分の持っているメジロでハリ合いをした。

高木木の梢だけでなくコバンの中でも「ハル」ので、競争するために各自、自慢のメジロをコバンに入れて持っていく。どちらがきれいな声でより長くさえずるかを競った。

空きも大事で、胸毛の茶色が濃いほど良くハルので、胸毛の濃いメジロの獲得に奔走した。山へ入って良くさえずるメジロを獲得するのである。高い木でさえずるのは自分の縄張りを主張しているのは間違いないと思うが、メスの関心を引き寄せるための行動であるかも知れない。メジロの沢山いるところへ行き、自分のコバンを木に架ける。周囲の木の枝にモチをつけた棒を何本か橋渡ししておく。

山のメジロは自分の縄張りに別のメジロが侵入したと思い、木の梢で鳴くのをやめて侵入者の近くへ降りてくる。コバンの周りをウロウロするうちに、モチにかかって捕まると言う算段である。まず捕まったメジロの胸毛を見て良し悪しを判断する。米糠などで足についたモチを丁寧に取り除き、持参した別のコバンに入れ風呂敷を被せる。風呂敷で暗くしておかないと、コバンの目の間から逃げようと思って、隙間へ頭を突っ込むので、目をやられてしまう。

家に持って帰ってからも二、三日は暗くしてコバンの中の生活に慣らす。慣れるにしたがって徐々に風呂敷を取り、明るくしていく。ここまで来ると逃げようとしなくなり餌も食べ、普通の生活をするようになる。時々山へ連れて行ってさえずりの調子を観察する。そして子供同士のハリ合いに登場する。

長く飼っていると可愛くなり、情も移って大事に育てるようになる。好きな人は、空き籠に金網で囲った大きなケージを作って、沢山のメジロを飼うようになる。

昔は捕獲できないので、昔語りになってしまった。

葉山の守（もり）さん

最近兵庫県庁OBで現在は大手ゼネコンに籍を置くMさんとゴルフをする機会が増えた。現役時代もゴルフの話はよく出たが役人とのゴルフはとにかくややこしいのでしなかった。

Mさんは神戸生まれであるが、第二次大戦中お父さんの田舎高知県葉山村に疎開し、小、中、高と過ごしたらしい。そんなことからお互い高知の方言には詳しいので田舎言葉そのまま話をするのがよくある。「今日はこじゃんとやるぜよ」「たまるか、えらい遅けたねや」「葉山のおんちゃん」「加茂のおんちゃん」など懐かしさも手伝って意識して高知弁をつかうことが多い。葉山村で思い出すのが子供のころのことである。

高知県葉山村は僕の生まれた加茂村からは、佐川町を通過して斗賀野峠と言う大きな峠を越え、須崎町（現在は須崎市）に着く。水深が深く天然の良港で、その昔高知県では宿毛と並んで軍港であった。大きな軍艦がいつも停泊しているのを見た。この須崎市からアラスカまで日本かわうそで有名な新庄川に沿って、一時間ほどさかのぼると葉山村である。10年ほど前にこの葉山村を通る機会があり村の歴史館に立ち寄ったことがある。大阪ガスをはじめ神戸製鋼とか関西の大企業を起こした人々が、この葉山村から出ているとのことで、びっくりした。何の産業もないこの寒村から日本の経済を動かすような人材が何人も出ていることを聞き、大きな感銘を受けた。

葉山は6人兄弟で皆年齢が接近している。父が次男であったため分家である。本家も全く同じで6人兄弟、年齢もほぼ同じような構成。従って子供が小さいころは、どちらも大変で、特に本家は田んぼや畑を作っており、農閑期はカイコを沢山飼っていたので年中忙しく、親が子供の面倒を見る時間がない。勢い誰か子守をしてくれる人を雇わなければならなかった。そんなことからこの葉山村から小学校高等科を出たくらいの女の子によく住み込みで手伝いに来てもらっていた。2年ほどするとその女の子は葉山村へ帰り、代わりに又かかかくらいの歳の女の子が来る、と言う次第で我々本家、分家ともいつも誰か葉山村から来た女の子がいた。これを葉山の守さんと言っていた。

守さんはいつも子供をおんぶして畑の草を引いたり、台所の手伝いをしたり結構忙しいのであった。時々おんぶした子供がおしっこをし、おしめから洩れたのが守さんの背中を濡らして流れ落ちているのを見て、守さんも大変だなと思ったものだ。子供たちは年長者の守さんを中心に集まってお互いの家に行ったり来たりしてよく遊んだ。

守さんもそれぞれ個性がありおとなしく何でも言うことを聞く子もおれば、案外癩癪な子も居るとパイとふくれたり、使う側も結構大変だったように思う。無理もない。一時期遠くで親元を離れ、よその家で子守やら手伝いをするのだから、今考えるとかわいそいかならざるが、当時ではこんなことは当たり前で、雇い主も叱ったりなだめたりしながら普通に仲良く暮らしていたように思う。

何年も一緒に暮らすと情も移り、葉山村の実家へ久しぶりに帰るときは少しばかりの
恋しいをもらい近所の子供たちが見送りに集まって、形ばかりのおみやげを渡したりして
涙を惜しみ、守さんも親と一緒に泣く泣く帰って行ったことを思い出す。

今の子供たちの暮らしぶりを見ていると昔の子供同士の情の通い合う様子がたまらな
く懐かしい。

おわり

平成15年8月 記

僕たちの旧制中学時代

昭和18年僕たちは高知県加茂小学校を卒業した。卒業前の一年間、中学校の受験準備をした。40人ぐらいのクラスで10人程、残り的人たちは高等科へ進み、卒業すると大塚家の農業を継ぐか国鉄、農協などへ就職していた。

当時の旧制中学は5年制で、小学校6年か高等科から入学していた。戦時中のため入学試験も僕たちの年代から学科の試験はほとんどなく、面接（僕たちは口頭試問といっていた）と体育の試験が主であった。したがって受験準備といっても先生の質問に上手に答える練習をしたり、鉄棒や跳び箱を放課後やるぐらいのものだった。

僕たちは田舎の村なので中学へ行くとなると、高知市内まで汽車通学しなければならなかった。隣の佐川町（現在は加茂村も合併）には高等女学校しかなかった。当時高知市内には男子校で普通科の県立城東中学、海南中学いわゆる一中、二中と私立では土佐中学。そのほかには県立工業学校、市立商業学校、県立農業学校、私立商業学校の実業学校があった。又女子校では県立高等女学校が2校と私立が2校あった。戦時中のこととて男子校と女学校に分かれ、男女7歳にして席を同じうせずの鉄則が貫かれていた。

僕ははっきりした目的意識もなく、父は国鉄に勤めており、（当時は中国の鉄道に勤務していた。）兄弟も多いので周囲から勤め人になったらどうかと言われ、なんとなく商業学校を受験することにした。商業学校では市立高知商業学校と私立城東商業学校（城商と言っていた）があったが僕は城商を選んだ。選んだと言うより、そこしかなかったといったほうが正しい。受験当日は家を出るのが少々遅れた。加茂駅まで30分の田舎道を歩かなければならない。駅のかなり手前の田んぼ道から上り列車の来るのが良く見える。その日もはるか向こうの山すそを、煙を吐きながら駅に向かってくる列車が見えた。遅れては大変と駅まで走った。僕は子供で少々走ってもどうということではなかったが、一緒に来てくれた母は走るのには苦手で大分こたえたらしかった。

高知駅まで30分の汽車。高知駅から歩いて15分。学校は木造二階建ての校舎が2棟となり、剣道と柔道の道場があり、その隣は多賀神社。やはり父兄同伴の子が多く、教室のあちこちで待っていた。そのうち指示があり、子供たちだけ校庭に並び順次教室に入って面接を受けた。面接では日本軍がどこで戦い勝利しているかなど、戦争に関する問題が多かった。その後鉄棒の試験があった。逆上がりは上手に出来るかどうかだったと思う。僕は何れもあまり出来は良くなかったが後日発表を見に行くと、自分の受験番号が出ており合格を確認した。競争率3倍ぐらいではなかったろうか。昔も今も同じで合格すると嬉しくなんとなく将来に夢が広がるような気がして早く帰って皆に報告せねばと帰りを急いだ。途中高知市はりまや橋に近い京橋にいつも世話になる叔父が住んでいたの、そこへ寄り報告をした。叔父は仕事で留守、叔母が髪結いの店をしていたので少し手を休めたいそう喜んでくれた。家では先ず母に報告をした。何年も女手ひとつで育てた長男

が合格したことでことのほか嬉しそうだった。又兄弟も夕方帰ってくると良かった良かったと皆で喜び合った。

昭和18年4月晴れて高知城東商業学校に入学した。2階の講堂で入学式。校長先生や来賓、父兄代表が挨拶の後クラス編成があった。五クラス位になったと思う。入学に際しては学校の規則で服装を規制されていた。戦時中であるが服は所定の学生服、詰襟に白いカラー、帽子は県下中学校共通の戦闘帽。いずれも物不足の時代、服も帽子もラミー(草の繊維)製で直ぐ破れそうなもの。靴は皮製の背囊、靴は黒の革靴が規定。それに同じくラミー製のゲートル。靴や靴の規定品はほとんど市中で売っていないので、靴は上級生が卒業するとき順次譲り受け、靴は地下タビがもっとも人気のある履物であった。しかし中々手に入らない。皆どこで手に入れてくるのか地下タビ通学が結構多かった。ただし規定の服装を変えるときは異装許可証が必要で、学校事務局に申請して許可を得ていた。僕は音楽部へ入っていたので、靴は2年生になるとき先輩のKさんから譲り受け、靴は地下タビがないので運動靴で通学した。靴での思い出がひとつある。入学した当時はしばらく市内、おじいさんの叔父の家に居候させてもらった。叔父が警察官だったので、そのついでで刑務所から黒の革靴を手に入れてきてくれた。クラスの中でも黒の革靴を履いてきている者は数えるほどしかいないので嬉しくて、翌日少しきついが立派な革靴を履いて喜び勇んで登校した。一度その日は勤労奉仕の日になっており行軍をかねて日章の飛行場(現在の高知空港)へ車むしりに行った。たまたま雨上がりの後で飛行場は水溜りがいっぱいあり、そこで草むしりをしたのでさすがの高級革靴もひとたまりもない。帰る頃には水でふやけて靴底が剥がれてしまいやっとの思いで家に帰った。一日だけの高級革靴であった。

入学後最初の一年間は時間割どうりの授業があり、各学科とも新鮮なものばかりで興味も湧いたがどれも難しく、特に数学や英語には苦勞した。一学期が終わると学期末の成績表をくれる。心配していた通り数学と英語がとくに良くない。秀、優、良、可、不可の評語で学年末に不可の評価があると落第させられる。一方全部優以上をもらおうと学力賞を争う。優と書いた小さなバッジを襟につける。かっこいいしあこがれたが僕は一度ももらったことがない。田舎の学校で多少成績が良くても市内へ出てくると各地から優秀な生徒が集まってくるので中々思うようにならない。そのうち劣等感を感じるようになる。それでも落第はいやで英語の単語帳を作り歩きながらスペルを覚える。数学も予習復習に精進した。僕たち1年生はA組からE組みまで5クラスあったように思う。クラスは背の高い方から高い方へ並ばされたので、僕はいつも前から3番目くらい。大きいのは大人顔の人、おとなしい人、やさしい人、秀才型の人、顔のごつい人、喧嘩に強い人、ずいぶんいろいろの人材がそろい、クラス中毎日にぎやかに騒ぎまわっていた。

学科のほかに戦時中のこと、中学生も軍事教練や行軍が正課にあった。兵隊の位でいざよ佐から准尉までの配属将校が3人ほどおりに週に3時間ほど木銃で突きの稽古、分列行進や駆け足の練習をさせられた。気合の入っていない生徒には隊列から呼び出され木刀で責められた。又一生懸命やっているとはほめてくれた。高知市近郊の山へは時々行軍をし

た。学年全員でクラス毎に隊列を組み往復五時間位歩いた。山の上で弁当を食べ、誰かが焼き芋など、おやつを持ってきており皆で仲良く分けて食べた。

今で言うクラブ活動も結構盛んだった。隣の多賀神社のそばに剣道場、柔道場、又校舎に隣接して25メートルプールがあった。ほとんどの生徒が何らかの部に属し毎日放課後練習に余念がなかった。僕は文科系の音楽部へ入り2階の部室で上級生、四五年生の指導で毎日練習をしていた。トランペット、トロンボーン、クラリネット、アルト他一通りの管楽器もそろい、それに大太鼓、小太鼓があつて楽団の体をなしていた。僕はアルトを吹けと言われ、大きなラップを抱きかかえて練習した。上級生も厳しいところとやさしいところ、両面があつて人間関係もよく戦時中にしても楽しいクラブ活動であつた。正月、紀元節、天長節、明治節など祭日には登校して式典があつたので、音楽部は君が代やその日の曲を演奏し生徒はそれに合わせて歌をうたつた。

授業も熱心な先生が多かつたので毎日が緊張した雰囲気勉強できた。たまに先生の失言があると小声でささやきあつたり、先生のあだ名を呼んだりしたが現在のように授業に支障が出るようなことは一度もなかつた。

叔父の家での下宿生活も二三カ月に切り上げ、後は加茂村の実家から汽車通学をした。毎日同じ汽車で各学校の生徒が通うので、中には不良も居り洗面所にたむろしてタバコを吸つたり、女生徒をひやかしたり、たまには喧嘩したりで変化のある汽車通学であつた。

こうして一年が過ぎた。曲がりなりにも2年生に進級したが戦争は益々激化し本土空襲や、そのうち敵が上陸してくる話などやかましくなり、特に高知県は上陸進攻してくる最も可能性の高い土地柄であつたので2年生一学期からいわゆる通年動員となり、僕たちは近郊の農家へ稲刈り、麦刈り、田んぼの土地改良などに駆り出され、ほとんど毎日農家の手伝いをした。上級生は工場へ動員されたり予科練や士官学校、幼年学校など軍人の学舎へ入学したりで、ほとんど学校で見かけることはなくなった。たまにかっこいい予科練の軍服を着て学校へ訪ねてくる人たちもいた。

戦争はさらに激しさを増し東京や大阪など大都市が空襲されるに及んで各地に陣地構築や防空壕作りが盛んになり、高い山の上にはたいてい砲座作りの工事がされるようになって、僕たちは麓からじゃりやセメントを、二人一組で頂上へ運ぶ作業が続くようになった。山上への途中はやまももやビワなど果物の多い地区で途中で一休みしながら果物を盗んで食べた。

物資の不足から汽車通学も厳しくなつた。少ない車両で多くの人を乗せるので客車に入りきれないときは機関車のデッキにしがみついて通学したが、そこは子供のことで、危険ではあるが結構楽しかつた。又敵機の襲来に備えて機関銃を据えた列車が時々通過していった。射撃しているところを見たことはなかつた。このようにして2年生も勤労奉仕に明け暮れやがて自動的に3年生になつた。

ある朝加茂駅へ行く途中東の空が真っ赤に染まっており、人づてに高知市が空襲で焼かれたと聞いた。その日は汽車も通らないので家へ帰り、翌日駅にいくとたろうじて汽車

は動いているとのこと、高知駅までやっとたどり着いた。街は丸焼け、あちこちにまだ煙が上っており異様な臭いがしている。学校まで歩いて行ったがもちろん学校も焼け落ちて何も無い。皆で相談し今まで行っていた陣地構築の現場まで1時間あまり歩いて行った。兵隊さんたちはいつものように黙々と作業をしている。僕たちも作業を手伝ったが次の日から交通手段がないので、各学校共自分の郷里の農作業を手伝うことになった。出身の小学校に集まってそれぞれの農家へ出向き草刈り、麦刈り、稲刈りなどに精を出した。

この勤労奉仕もそんなに長くは続かずやがて終戦となり生徒はそれぞれの学校へ帰って行った。僕は父が中国に行っており、何の連絡も無く、母は一人で6人の子供を抱えて苦労しているので学校を辞めてさつまいも作りをすることにした。保証人になってもらっていた叔父に相談せず退学したので後で随分叱られた。

おわり

平成15年10月 記

お茶の木

我が家の狭い植え込みに一本のお茶の木の鉢植えがある。

10年程前、奈良、山の辺の道を歩いた時小さな子生えを見つけ持ち帰って鉢に植えておいたものである。二三年後には秋になると独特の白い花をつけ、実も数個なるようになっていた。昨年の阪神大震災で家の部分建て替えの際、一年近く隣組の共有地に置かせてもらったので充分世話が出来なくなった為、一部枝枯れが出来たりで、この春も芽吹きはしたものの香いが無い。ようやく家も出来上がり以前より更に狭くなった植え込みに、持ちかえったが、他の鉢植えが多く場所がないので、処分するかと迷ったが、何かお茶の木だけは手近に置いて育てたいと思い、こやしをやり水も毎日欠かさずやり世話をしている。

私が生まれ育ったのは高知市から西へ約20キロの元加茂村と言う貧しい農村で我が家も例外ではなかった。しかし大自然に囲まれた、平和な住みやすい村であった。

四方椎、檜、檜などの広葉樹の緑に囲まれたなかで、山の斜面に段々畑がありその岸には必ずお茶の木が植えてあった。株の大きさからして多分三四十年は経て来たであろうとおもわれる。

毎年5月にななり山の緑と一緒にそれらのお茶の木には、若い芽が吹き出して、こんもりとした小さな山がいくつも出来る。こうなると毎年恒例のお茶摘みが始まる。母が近所の奥さんたちにお願ひしてお茶を摘む人、運ぶ人、鍋で炒る人、炒りあがったお茶を揉む人、それぞれ分担を決めて忙しい一日が始まる。

まずお茶を摘む人は、籠を持ち片手で新芽をしごき取るやり方で摘み取っていく。みるみる籠が一杯になり、別の人が空籠と交換していく。

庭に大きな籠を作り、鍋をかけて摘み取ったお茶の葉をその中へ入れて、大型のシャモゴで揉む。適当に炒りあがったところで、筵の上に広げて手で揉む。あたり一面五月の陽光の下でこうばしいお茶の香りが充満していく。我々子供も深呼吸しながら、それぞれの持ち場でお手伝いをする。

揉みあがったお茶は筵の上に広げて天日で干す。筵の数が次から次へと増えていく。2〜3日乾燥させると仕上がりである。出来上がったお茶は袋詰めにして手伝ってもらった近所の家々に届け、我が家でも一年中飲むお茶を保存する。

お茶を飲むときはこの茶葉をもう一度小さな鍋で炒り使用する。黄色味を帯びたお茶は湯の恵み一杯受け、こうばしい大自然の味わいがある。

親を離れて神戸に来てからも、お茶摘みは続けられ毎年母が送ってくれ、おいしいお茶を飲みながら故郷を偲ばせてもらった。

親では家で作るこのような風景はもう見られなくなりさびしいかぎりである。

上高地の思い出

もう半世紀近くも昔の話。

夏の間もないころの職場の旅行である。8月盆休みを利用して、一行7名。朝神戸を出発し、テンド塔など名古屋見物をした後、松本行きの夜行列車に乗った。松本で私鉄に乗り換え、新美ヶ谷でタクシーに乗る。目的地は上高地。朝6時過ぎ、緑濃い山々を縫って走るうち突然境界が開け一瞬眠気からさめた。何たる光景、「タクシーを止めてくれ」誰かが言った。山から朝もやが忍び寄っている大きな池。大正池だ。湖面にはあちこちに噴火の名残の樹木のスケルトンが点在し、焼岳の頂上は朝日で茜色に染まって湖面のところどころに映っている。物音一つしない。遠くには穂高の山々が雲ひとつ無い青空に勇姿を現し、雪渓が氷の白い線となって光っている。

しばらく呆然と立ち尽くしていたが、ややあって我に返り、おお寒、と言いながらタクシーに乗り旅館へと急ぐ。宝石のきらめきに似た梓川を眺めながら河童橋を渡りきるとそこにその晩泊る旅館がある。取り敢えず荷物を置く。お茶を飲むと直ぐ焼岳に登ることになった。

尾根に沿って歩く。途中ウエストンの碑を見ながら20分もすると焼岳への登り口である。10人ほどのグループが一行になって登る。早朝に登山したのだろうか、もう降りてくる人々とすれ違う。必ず「こんにちは」とか「おはようございます」と挨拶をする。何となくすがすがしい。こちらからも「こんにちは」が自然に口をついて出る。途中大きな倒木に多く出会う。そのたびにそれを乗り越えたり、下をくぐったりして進む。カラマツ林やササなど針葉樹林が多く、松林の匂い、土の匂いなど大自然の中にいることを実感する。

この時間ほど登ると樹林はほとんどなくなり、むき出しの岩肌や石ころが目につくようになる。活火山である。しばらくすると勾配がきつくなり大小のごろごろ石の上を手を突きながら進むようになる。ときどき石ころが上から転がってくる。注意しないと怪我をする。勾配はますますきつくなり石ころも大きくなる。胸突き八丁とはこのことか。上の方から「転がった」と大声がかかる。そのたびに右に左に体をかわし、下の方に注意を促す。ところどころ水蒸気が昇っている。頂上が近いらしい。真夏の太陽が背中に照りつけるがそれほど暑さを感じない。昨日の名古屋の暑さがうそのようだ。

岩石に注意しながら足を踏みしめ踏みしめひたすら登る。頂上はすぐそこに見えてきた。進むものは何もない。登り始めて約4時間。2,500メートルの頂上に立った。天気がいいので視界360度。乗鞍や穂高がすぐそこに見える。残雪に輝く山々は神々しいの一言に尽きる。登山家の頂上を極めた気持ちがちょっぴり分かる。

頂上でしばらく眺望を楽しみながら休憩の後、下山の途につく。注意しながらごろごろ

石の斜面を過ぎると後は一気に走りおろる。

下山すると日もまだ高いので梓川沿いに白樺林を散策する。透き通った雪解け水がキラキラ光りながら流れていく。ときどき川原におりて手を水に浸けてみる。冷たい。文字どおり氷水につけている感じで何分ももたない。冷たいというより痛い。皆思い思いに水を楽しんでいる。川原の石も長年の水で洗われて丸みを帯びたものが多い。不思議に落ち葉や木の枝などごみの無いきれいな川原だ。晴れ渡った東の空高く、穂高の峰がそびえている。川のせせらぎを聞きながら河童橋そばの旅館で眠る。

一夜あけて次の日は乗鞍登山である。登山道が整備されてバスが頂上近くまで行く。登っていくにつれて車窓から見える這い松や高山植物の花が多くなっていく。ところどころ雪渓の間に高山植物のきれいな花が咲き、そばを雪解け水がチョロチョロ流れる。天気が良いので遠くに残雪の山々が右に左に見えてくる。しばらく景色を楽しむうち畳平に到着。昨日の焼岳と同じ2,500メートルの高さである。バスから降りて付近を散策する。何か肌寒さを感じる。と、見る見るうちに雲が帯を覆い薄暗くなってきた。霧雨が肌にまつわりひんやり心地よい。しばらくすると雲が瞬く間に通り過ぎまた元の良い天気になった。やっぱり高い山の変わりやすい気象である。

周囲の展望に満足しふたたびバスの人となる。バスは高山に向かって登山道を降りて行く。

最近上高地に行き昔を懐かしんだ。大正池には土砂が流れ込み、スケルトンも少なくなって、昔の広い池の印象が少し小さく感じた。また焼岳は危険なため、頂上まで登れなくなっていた。しかし梓川の冷たい清流は、昔と変わらず、夏の日差しに光り輝いていた。

おわり

平成14年8月 記

春の足音

神戸は海、山に恵まれて四季の移ろいがはっきり目に見える。ここ舞子は特に海に接しており、明石海峡大橋のおかげで海辺をはじめ、いたるところに緑の公園が出来て、従来からの豊かな自然に加えて、なおいっそう四季を敏感に感じる。

2月半ばになると、例年隣の公園にウグイスがやってきて、下手なさえずりを1日中やっている。

春の感触を肌で感じるようになると、いつも高知の田舎の春を思い出す。四方山に囲まれた山村はことのほか春が早くやってくる。2月には家の周りに植えられた梅のつぼみが膨らみ始め、3月初めまで白い花で囲まれた生活となる。メジロ、ウグイスなど小鳥が大勢やってきて蜜を吸う。お返しに美しい声を力いっぱい張り上げて挨拶をしてくれる。梅の花が終わる頃は、家の周囲は文字通り花吹雪となる。

3月に入ると、あちらこちらの田んぼに菜の花が咲き始める。田んぼの畦道には草の芽吹きの中に、たんぼぼや色々の草花が咲き始める。小川のほとりでは、青いセキショウのそばのネコヤナギに大粒の花が咲く。山々の緑が一段と濃くなる。冬の間、人影がなかった田んぼや畑に人々が出て鍬を振るようになる。人の話し声も大きく明るくなる。川のせせらぎの音が聞こえてくる。犬もどこかで鳴いている。みんな春が待ち遠しかったのだろう。

3月も中旬になると蛙がげろげろやかましく鳴く。近くのお大師様の彼岸桜がもう咲いている。この辺ではこれが桜の開花第一号である。山のあちこちにはピンクのツツジが咲き、桜の花も本番を迎える。このあたりは吉野桜よりも山桜が多い。花と葉っぱが同時に開く。吉野桜よりも地味であるが、この方が清楚な雰囲気を醸し出してくれる。古より言う山桜といわれるがまったくその通り。付近一帯が桜の匂いに浸っている気分になる。

あちこちで花見の宴が始まる。当時娯楽の少ない山村のこと、この花見は大人も子どもも参加して春の恵みを満喫する。大人はどぶろくや焼酎で乾杯、乾杯。子供は腹いっぱいご馳走を食べる。1年で最も心うきうき身体いっぱいにはしゃぎまわるときである。

このころになると、近くの山に植林された何百本という杉や檜に花が咲き、花粉が風に吹かれて飛び散る。飛び散るといような生やさしいものではない。山一面にメリケン粉を撒き散らしたような光景。風に乗ってあっちこっち漂っている。この中で生活していて誰もくしゃみをしない。おかげで花粉症には縁がない。

おわり

平成8年5月記

第2部 随想

—この頃思うこと—

出生の記 私の顔の傷

私は今年一月で満71歳となり完全に老人の部類に入った。71年前 高知県高岡郡加茂村で生まれた。父、母、の話を知ると、初めての子であるので、母親は栄養に心がけ一生懸命生まれてくる子供のために、心を砕いていたと見え、太りすぎていたのか、産気づいてからもなかなか出ようとしない。産婆さんでは間に合わず、夜が明けて父はあわてて佐川町(藤町)の秋葉医院の医者呼びに走ったそうである。当時は自動車もない時代、一月の寒い朝、雪が積もった中をハダシで約三キロ程の峠道を息せききって走る父親の姿が目に見える。やっとの思いで医者が到着したが頭が少し出ただけで、中々スムーズに出そうもないので、やむなく出掛かった頭へ金属のハサミをあてがって引っ張り出したのである。

体重四キロの立派な子供が生まれみんなホットし産湯を使ったが、無理に頭を掴んで引っ張り出した為、今もって顔にその痕跡を残し、お世辞にも男前とはいえない男になってしまった。お陰で今日まで色恋で女に苦労した記憶が全くない。

これは自他共にみとめるところである。喜んでよいやら悪いやら。

おわり

平成14年2月19日日記

母の故郷

緑の山々が連なりその中にポッカリ穴が開いたように小さな平野がある。川が流れそれに沿うように鉄道が走り、時々C-57型機関車に引かれた2両連結の客車が通る。黒い煙を吐きながら八幡様のカーブのところで決まって「ボーツ」と汽笛を鳴らす。汽車が通ると近くの家々から子供たちが一斉に走り出してきて手を振る。

小高い丘の上に大きな杉の森がありその南側にワラぶきの家が見える。僕の母の実家である。

だらだら坂を上っていく。両側に桑畑や野菜畑があり、道の両側には色々の草花が咲いている。坂を上り詰めると庭が広がる。坪庭である。春は麦、秋は稲の脱穀をしたり、筵を広げてそれを干したりするための広場である。

正面の一段高いところに母屋があり、畳敷きの各部屋はすべて南向きで冬は暖かい。台所に近い部屋にはいろりが切って有り、長年の煙でいぶされ黒光りしている自在には、大きなやかんが架けられ、チュンチュンとお湯が煮えたぎっている。

台所には土で作ったオクドがあり料理の煮炊きに使われる。裏木戸を開けると、そこには流しがありその隣に水がめがある。

母屋の片方には直角に納屋、牛小屋、風呂、便所と連なり冬の寒い時など夜、便所へ行くのが大変である。

母屋のもう一方には広いひさしが伸びており、その下にダイガラがある。足踏式の米搗き機である。これに続いて又納屋が建っており、牛に引かせる鋤、鍬など農具と米、麦の収穫時に使う脱穀機、トウミ（風を送って穀物とごみを選び分ける）などがおいてある。

母屋の北側には大きな杉の木が天高くそびえており、その横には一抱えもある椿が林を作っている。

これが典型的な田舎の農家風景である。

僕は隣村の自分の家から母に連れられバスに乗ってその家によく遊びに行った。バスを降りると小学校高等科に通う5つお姉さんの直ちゃんが迎えに来てくれている。途中田んぼ道を通りツル井（泉）から流れ出る小川を橋の上から見るとたくさんのフナが泳いでいる。母にせかされて坂を上ると家に着く。おじいさん、おばあさんが首を長くして待っている。2人に挨拶をする。母からよその家へ行ったら必ず大きい声で挨拶をするように言われている。腰の曲がったおじいさんはこちらを見ながら、キセルに刻みタバコを詰めて吸っている。そばでおばあさんはニコニコしながら、「よう来た」と言ってくれる。直ちゃんや裏の家の同級の菊ちゃんたちとすぐ横の大きな椿の林へ行ってみる。地面一杯にツバキの花が散り敷いている。直ちゃん達はそれを一つ一つ拾ってヒモに通し首輪を作って僕の首にかけてくれる。しばらくツバキの林で遊んだ後、家に帰ると母は日の当たった縁側でおばあさんと長い話をしている。

そのうちおやつを食べなさいと声がかかる。サツマイモである。蒸したてのをフーフー言いながらみんなで縁側に並んで食べる。こんなおいしいお芋を何処で作るのと聞く。直ちゃんはお父さんがこの上の畑で苦労して作っているとのこと。成るほどと思う。

しばらくするとおばあさんが、直ちゃんに水を汲んできて欲しいと言う。この家では飲み水から風呂の水まですべて坂を下りた田んぼの中をつる井の水を使っている。四方を分厚い杉の板で囲ってあり1メートル位の深さからきれいな水がコンコンと湧き出している。木の桶に水を汲み、序に芹を摘んでいくことにした。つる井から湧き出た水は小川となって流れておりその両側にみずみずしい芹が密生している。混み合ったところを選んで適当に間引く形で根から引き抜く。緑の葉っぱに白い根、芹は根もおいしい。一束を藁で縛って藁にもって行ってくれと言う。直ちゃんは水が重たいからだ。

やがて家では汲んで来た水や芹を使って夕飯の支度が始まる。僕の母もそれを手伝っている。子供たちはしばらく庭で鬼ごっこなどして遊びつかれた頃夕飯となる。

おじいさん、おばあさん、仕事から帰った叔父さん(母のお兄さん)、おばさん、直ちゃんのお母や妹たち、順番にいろいろの周りに座る。赤い火がパチパチと音をたてて燃えている。壁に懸ったやかんからヒューヒューと蒸気が噴き出している。麦ご飯におかずはいわし、大根と里芋の煮付け、白菜の漬物。里芋がおいしい。この辺りは特においしい里芋が採れる土地柄だ。おじいさん、叔父さんはお酒をチビチビやりながらご飯を食べる。

夕飯後子供たちはみんなで汽車を見ることにし、見晴らしの良い庭先に皆座って汽車が来るのを待つ。澄み渡った夜空には文字通り宝石をばら撒いたように星がキラキラ輝いている。家の裏の高い杉の木から「ホーホー」と言う鳴き声が聞こえてくる。フクロウだと言う人もいるしハトだとする人もいる。いまだに鳴き声の主は分からない。

やがて遠くから「ボーツ」と言う汽笛が聞こえた。汽車がくるぞと誰かが言った。直ぐ電車のライト、客車の窓窓の明かりが長い行列のように過ぎ去って行った。後に黒い煙を吐きながら。

もう少し皆と一緒に暗い外にいて「ホーホー」を聞いたかったが家の中からもう寝なさいと母の声で家の中に入った。その夜は直ちゃんが僕と一緒に寝てくれた。暖かいフトンと直ちゃんのおぬくもりで気持ちよく直ぐ眠ってしまった。

「何処へ行っちゃったぞね」(何処へ行ってたの)顔馴染みのバスの運転手が母に聞いてくる。「鎌倉(場所の名前)の実家へ」翌日の帰りのバスの夢をみていた。

おわり

平成14年1月 記

樟脳屋

高知県加茂村、昭和20年代のことである。家のすぐ下を国道32号線が通っている。じゃり道で曲がりくねった道路。国道と言ってもお粗末である。この道路を通って30分ほどかけて学校に通う。その途中、すごく良い匂いのするところがある。樟脳屋の前である。クスノキの原木から樟脳をとる工場で、みんな樟脳屋と呼んでいた。オーナーのおじさんは頭を短く刈りチョビひげをはやしていたので、田舎では珍しくエキゾチックな感じのする紳士であった。

工場は道路から少し離れたところにあり、いつも旋盤がヒューン、ヒューンとうなり声を上げて廻っていた。またその奥には大木に囲まれた大きな岩があり、その下から夏でも冷たいおいしい水が湧き出していた。学校帰りにはみんなここへ来て水を飲んで帰った。このきれいな水が樟脳を蒸留するときに使われる。

樟脳の原木は遠くからトラックで運ばれてくる。高知市の浦戸湾沿いにはクスノキの大木がいたるところにあり、村の若い衆が二三人のグループで、のこぎり、チョウナ（大型のナタ）、鋏などを使い大木を切り倒し、定寸に切断する。土に埋もれた根っこは樟脳の成分が多いので、周囲の土を鋏で取り除き、小さな根っこを切りながら、よっこいしょと地上に転がす。大きいものは1トン近くあるので、更に道具を使って小さく割らないと持ち帰れない。1本のクスノキを倒すと10トン以上の原木が取れる。これをトラックに積み工場まで運ぶ。持ち帰ると、とりあえず国道の両側の空き地に転がしておく。それを毎日工場に勤務しているおじいさんが、のこぎりで作った切り口を作りタガネを打ち込んで割っていく。又根っこには石をたくさんかんでいるので、辛抱強く取り除いて、ネコぐるまで運びやすい大きさにする。

持ち運びしやすい大きさに切り刻まれて原木は若い衆が2人で担いだり、ネコ車で工場へ運ぶ。工場では大きな鉄の刃の付いた旋盤が回転しており、これにかけてコッパ（小さく切り刻んだもの）にする。このコッパをトロッコで運び上げ、縦4メートルほどの大きな蒸し器（木製の円筒形）に放り込む。一瞬になると蓋で密閉する。蒸し器の下には大釜に湯が煮えたぎっておりこの蒸気で蒸留する。樟脳のエキスが溶けた蒸気は、冷却パイプで水溶液となりタンクに貯められる。これが樟脳の原料である。

工場内は樟脳の匂いが充満しており、これが国道まで流れていって人々を感嘆させる。この工場にいと風邪を引かないとよく言われていた。樟脳の量はオーナーのおじさんがチェックし、異常がなければ30リットルほど入

玉瓶の容器に詰めて出荷する。

工場の付近は田舎でも特に自然環境の良いところで、その横には天を突くムクの大木があり、秋になると学校帰りにこの木に登って黒く熟れたムクの実を食べた。この実はひよどりなど鳥の好物で人間の子供と鳥が仲良く実を食べていた。通りがかった近所のおばさんに「危ないから早く下りてきなさい。」とよく叱られた。

冬は学校帰り、工場に寄って火の燃え盛る釜の前で、友達と仲良く並んで湯をとった。時々オーナーの奥さんがやきいもを作ってくれ、あつあつのおいしい芋を食べさせてくれた。腹をすかしての帰り道、一番の楽しみであった。

夏は工場の奥の山へ入り、岩の間から流れ出る泉のほとりで、樟脳の匂いあふましいの冷気の中で、暑さをしのいだ。懐かしい自然の恵みの思い出である。

平成 19 年 4 月 24 日記

注:

日本統治時代の台湾。阿里山周辺など台湾中央山脈には、樹齢千年を超えるクスノキが多く、日本資本により樟脳が生産された。

樟脳はセルロイドの原料にもなり、当時台湾樟脳は世界の生産量の9割を占めていたとのことである。(07年4月15日朝日新聞記事)

わが故郷の四季

昭和10年代の高知県加茂村

高知市から西へ国道33号線を車で約30分。隣の日下村（現在日高村）を過ぎると仁淀川の支流も一段と狭くなる。途中村で唯一の酒屋さんや郵便局のある岩目地部落で国道と県道が二つに分かれ、川もそれに沿って二手に分かれる。国道を走り長竹部落をまっすぐ行くと10分ほどで僕たちの在所毛田につく。高知県高岡郡加茂村長竹毛田。小さな川を挟んで両側から山が迫り、山の中へ来たという実感が湧いてくる。山といっても四国山脈のような大きな山ではなく村々を隔てるせいぜい300メートルくらいの山に囲まれた村である。四方山に囲まれているので、朝もお日さんが顔を出すのは9時ごろになる。その代わり新緑の季節は燃える緑に自分が埋まってしまう錯覚に陥る。当時村の人口は二十人くらいのいわゆる寒村である。

貧しい寒村ゆえに現在のような公害もなく国道とは言うものの自動車も1日に数台通る程度で、子供たちはたまに自動車を通ると、巻き上げるほこりとガソリンの匂いを嗅ぎに道路まで走った思い出がある。

この田舎も春は庭の梅の花から始まる。家の裏には父が若い頃植えた梅ノ木が数本あり、2月頃になると白い花が一面に咲き、甘酸っぱい匂いがそこらあたりに充満する。メジロや鶯たち小鳥がその花に群がり蜜を吸う。蜜をもらったお礼に鶯はまだなれないホーホケキョをサービスしてくれるし、メジロは独特の澄んだ声でチーチーと鳴きながら枝から枝へ。名のごとく目の縁に白い円を描いている。羽は全体に緑であるが胸毛の茶色が濃いもの、薄いもの、それぞれ個性があって眺めていて飽きない。時々メジロ落としといって捕まえに行くことがある。なるべく胸毛の濃いのを集める。胸毛の濃いのが良くさえずる。子供同士でコバン（かご）に入れたメジロの鳴き較べをする。どれだけ長くさえずったか時間の長さを競う。長くさえずる胸毛の濃いメジロは子供仲間では重宝がられた。メジロおとしには鳥もちを使う。店で売っているが、器用な子供は自分で山からもちの木皮を剥いて何日か泥水に漬け、それを木槌で叩いて鳥もちを作る。僕は何べんもやってみたが成功しなかった。この辺りの山は自分の庭同然で、どこへ行けばどんな鳥が沢山いるとか、メジロを捕まえるのにはどこが適当か直ぐ分かる。

メジロで遊んでいるうちに3月になるとあちこちの畑に菜の花が咲く。菜種油を採るため作るが、しばらく一面の菜の花を楽しませてくれる。菜の花が咲き始めると、農家の人々も田んぼや畑に出て春の植え付けの準備を始める。

水ぬるむ季節と言われるが3月も終わりになり、泉の湧くほとりへ行くとふきのとうやふきどりの子供が芽を出す。春の光に照らされて、水がチョロチョロ流れる。親指くらいの大きさのいたどりの芽が落ち葉の間からによつきり頭を出してくる。子供同士で見つけておいて2、30センチに伸びた頃取りに行く。4月に入るとあちこちに大きないたどり

顔を出してくる。同時にわらびやぜんまいが芽を出す。茅わらに入ると子供の小指ぐらいの大きさのわらびが、綿帽子をかぶってによきによきでている。いたどりやわらび、ぜんまいは昔から保存食として重宝がられた。湯がいて天日で干して保存する。冬の間何もなかった田んぼにはれんげが咲き乱れ、見渡す限りれんげのじゅうたんである。学校の帰り道友達とこのれんげの花の上に寝そべって青い空を見上げたものだ。

この頃になると川の土手のあちこちにつくしの坊やが出始める。子供たちは手に手に籠を持ってつくしを摘み取り、もって帰って油いためをして食べた。そんなにおいしいものでもないがこの時期になるとなんとなく皆がこうして食べる。

山の早春の花はあせびである。この田舎にはあせびの木が沢山ありいっせいに白い花をつける。花は袋状になっており子供は一つずつ取って額に当ててパチンという音を楽しむ。ここから子供はヒッタイバッチと言う名をつけていた。

4月も半ばになると山あいの部落は春たけなわ。田んぼには牛に引かせた鋤で田おこしが始まる。通りかかりの人々は明るい声をかけていく。夜、寝静まったころには蛙の合唱が始まる。文字どおり大合唱である。迫り来る山々は緑が濃くなり大きくなった杉、檜の葉の先には無数のツブツブが見える。風が吹くとそこらあたり谷あい一面に白い粉が舞う。花粉である。子供の頃の我々にとっては毎年起こる当たり前のことで格別それを吸い込んでセキをしたりクシャミをしたりした覚えはない。大騒ぎしている現在と大違いである。

産木の多いところにはつつじの花が咲き始める。ピンクの花が山一面覆うと壮観である。つつじも5月に入ると真っ盛りとなる。山のあちこちにピンクの花が競い合う。川の水も温度が上がってくるので素足で入りやすくなる。大自然より川の恵みをいただく季節の始まりである。先ずゴリ押しから始まる。大人が集まって山から切り出した杉の小枝を2メートルほどの長さに束ねる。これを川の浅瀬に持ち込み両側から交互に引きずって掛け声とともに小石の上をこすっていく。上流に敷かれた目の細かい網にゴリは入り、四方から引き上げると沢山のゴリが取れる。ゴリは上流へ登る習性がある。2～3センチのゴリが網の中でピチピチはねる。頭の大きい、スマートなの、模様もさまざまに何種類かのゴリが居る。何回かやると1升ほどのゴリがバケツにたまる。家に持って帰ると母親がゴリ汁を作る。大根や豆腐などをいれた味噌汁。味噌とゴリのだしがよく合う。大人は寄り集まって、これを肴に一杯やりながら花見をする。暖かい風が頬をなでていく。1年の中でも気持ちの良い楽しい行事の一つである。

子供たちは川でハヤ(ハエ)釣りをする。山から手ごろな竹を切り出して釣竿を作る。真っ直ぐでしなりの良い竹を選び枝を落とす。これにテグスと針をつけ、浮きはそらの茎の茎を小さく切って使う。餌はクモや青虫。忍び足で川岸からそっと竿を振る。すると手ぎが引き込まれ、10センチから20センチほどのものが次から次へと釣れる。釣竿に夢中になり時には蛇を踏みつけて蛇もこちらもびっくり仰天することもある。魚は群衆で行動しているので勝負が早い。持って帰ると料理して晩のおかずとなる。多少生臭い味でおいしい。又この時期うなぎ漁が盛んになる。大人も子供もうなぎ捕りをする。

直径5センチ、長さ50センチ位の竹で編んだウエと称する籠に、みみずと砂と一緒にいれ、よく振って、夕方川岸に近い水の中に入り口を川下に向けて沈めておく。場所を変えて10個ぐらいセットする。翌朝早起きし朝露を踏んで回収に行く。早起きも苦にならない。結んだ縄を引っ張りながらそっとウエを引き上げる。ドキドキの瞬間である。ウエを立てるとうなぎが入っておればガサガサ音がする。音のするのもしないのもまとめて家に持ち帰り、うなぎを取り出す。1回に5~6匹は入っていることがある。これも料理して蒲焼を作り晩のおかずにする。食糧難の時代天然のうなぎは大変なご馳走である。川の漁は夜もある。やきどりといていた。意味はよくわからない。山から松の根を掘り出し松明を作る。昔切った松の根が骸骨のようになって油脂が凝縮されている。適当な大きさに切り分け、針金で作った籠に入れて火をともし。夜になると近所の2つ年上の昭ちゃんが誘いに来る。松明に魚入れ、うなぎをつかむ柄の長い鋏（鮫の歯のようにギザギザのある）等7つ道具持参である。家下の川へ入ってみる。かがり火で川の底までよく見える。手長えびが見える。網をそっと近づけるとすぐ逃げられる。ハヤやどんこは深みにいると見えて手が届かない。田んぼのうなぎを狙うことにする。家からさらに山奥へ入る。真っ暗闇の山田である。まむしなど蛇が気になるが、獲物のほうへ気が急ぐ。昼間谷川の穴の中にいるうなぎは、夜、田んぼへ上がってあたまじゃくしやどじょうを食べる。田んぼに入ると昼間見たことも無い、大きい、小さい、うなぎがうようよしている。稲の株を踏まないようにそっと田んぼへ入る。持参の鋏で大きいのに狙いを付けて捕まえる。一晩で形のよいうなぎが20匹以上取れる。2人で平等に分けて持ち帰る。料理は蒲焼と決まっている。

やがて田んぼに植えられた稲は気温の上昇とともに緑が濃くなり、朝早く田んぼに行くとも葉っぱには一杯の朝露がついてすがすがしく又力強さを感じさせてくれる。

5月の陽光で汗ばむほどの季節になると茶摘が始まる。裏の畑の石垣にはお茶の木が沢山植えてあり近所の女の人たちにも手伝ってもらって、手で摘んでいく。摘んだお茶の葉は大なべに放り込んで、しゃもじで混ぜながら炒る。炒り上がったお茶の葉を広げた籠の上でもむ。お茶の匂いでむせ返るときである。

庭に白い花を一面に咲かせた梅の木には大粒の梅の実がなり6月になると一家総出で梅の実を収穫する。木が大きいので高いところは竹ざおで落とす。全部とり終えると大きなバケツに一杯になる。これを母が塩漬けにして梅干を作る。夏バテやら腹をこわしたときなど薬代わりに食べさせられた。

各家の庭には大抵グイミ（グミのこと）の木が植えてあり大粒のグイミの実が真っ赤に熟れてくる。近所のおばさんに断り、子供同士で弁当箱にとってきて塩をまぶしてよく食べた。

陽気も夏の暑さを感じるようになると、家下を流れる川で水浴びをする。最近嫁いできた嫁さんが川に入って洗濯をする。石鹸の白い液が澄み切った水に溶け込んでいく。メダカが群れをなして泳いでいる。嫁さんの白い足の周りをぐるぐる廻る。子供たちはそのそばで水浴びをする。水浴びをしながら川岸のイタブ（いちじくの前種か）の実を採って

食べながら川を下る。川の兩岸200メートルほどイタブが自生している。紫色に熟れたのは甘くておいしい。熟してないのは次の楽しみに残しておく。子供たちの暗黙のルールである。

6月も半ばになると、夕方、ビーセンと言う昆虫が空一面に飛び始める。まもなくホタルが来ると言う前触れである。竹の竿で叩き落して遊ぶ。

ビーセンの時期が過ぎるとまもなくホタルの出現である。川に沿って大勢のホタルが波のように通り過ぎていく。橋の上は集団で飛び越えていくので、子供はそれを狙って竹の竿で落とし、畠でとってきたネギ坊主に入れて持ち帰る。ネギの中は適度な湿度があり、光が外から透けて見える。当時虫かごのようなしやれたものがないので、田舎の子供の知恵である。

山のつつじは終わり、代わって椎の木や栗の木に白い花が咲く。風に吹かれてなんともいえないすがすがしい匂いである。家々の庭には赤い葵が咲き、千日香やオシロイバナが満開となる。オシロイバナは花の後に黒い実をつけ、これを割ると中から白い肉が出てくる。これを手でこすって顔におしろいのつもりで塗りつける。ここからオシロイバナの名がついたかなと思う。この頃暑い太陽のもと元気よく育ってきた稲は子供の背丈近く伸び白い穂が出てくる。そばを流れる溝は太陽の熱で手をつけると暑い。どじょうやふな、げんごろう、水すまし達が元気に泳ぎまわっている。どじょうもぼんやりしているように見えて中々つかまらない。

8月も終わりごろ、旧盆の行事が始まる。家々では山から松の根を掘り出し松明を作る。戦国時代のかがり火のように3日3晩玄関先で燃やす。盆の16日には松明の残りを集めて、子供同士で盆飯を炊いて食べる。特にご馳走でもないが、子供の楽しみの一つである。

夏の川の漁で特筆すべきはかに捕りである。このあたりの川には殆どの石垣にかにがたかさん住み着いている。8月から9月にかけて咲くイタドリの花で時期の到来を知る。雨が降って川の水が濁り少し増水した状態がかに捕りに最適だ。田んぼの畦道の隣は大抵灌漑用の小さな溝が流れている。畦道を通ると草むらで休んでいる蛙が一斉に溝に飛び込む。魚用の小さなタモで蛙を捕まえる。殿様蛙のような大きくて品の良い蛙は逃げるのが早いので中々捕まらない。苦労して捕まえるとなんだか勝ち誇ったような気持ちになる。捕まえた蛙は残酷ではあるが足のほうから皮を剥いて丸裸にし、二三匹づつ束にして藁で竹竿のまきにくくりつける。濁って増水した川の岸辺に、くくりつけた蛙を下にして沈める。なるべくかにの住んでいる石垣の前が良い。しばらくするとかにが穴から出てきて蛙を食べ始める。竹竿を持つとかにのハサミが竹竿にあたるカチカチと言う振動が伝わってくる。竹竿をそーと引き上げる。重い。大きなかにだ。時によると2匹いるときがある。水面近くまで注意しながら引き上げてきて素早くタモですくう。これをバケツに放り込む。こうして多いときは20匹も捕れる。大きいのは大人の手のひら大はあり、濃い緑色の甲羅に大きなはさみを持っている。はさみには黒い毛がふさふさついており、これで挟まれると怪我をするので注意が必要。捕れたかにには持ち帰ってかぼちゃやなすと一緒に大きな鍋で煮

る。豪勢な夕食となる。まずはさみを割ると白い身がポロリと出てくる。みんな夢中になって食べる。毛の部分にはおいしい汁を含んでいるのでチュウチュウ吸う。胴体も2つ割にして食べる。又一緒に煮たかぼちゃやなすは、かにのだしが芯までしみこんでいる。食べ物不自由な時代、うなぎとともに大変なご馳走である。このようにして戦中、戦後川の恵みを存分にいただいた。有難いことである。現在は飽食の時代。当時を思い出してみてもあんなうまいご馳走には今日お目にかかれない。あの時代が懐かしく幸せだったと思う。

やがて秋風が吹く頃になると稲の穂は頭を垂れ始め次第に黄金色になってくる。春の土起こしから夏の草取り、重労働の後にきれいに稔った稲を見る心地は何にもたとえようがなく、身体全体が秋風の中で充実しきった感じになる。大人たちはあぜ道を満ち足りた気分で稲の実り具合を見回りに行く。

10月に入ると秋晴れを利用して一斉に稲刈りが始まる。空は抜けるような青さである。みんな田んぼに入り鎌で刈っていく。当然子供たちも稲刈りの手伝いをする。刈った稲束を切り株の上に倒していき出来るだけ太陽で乾燥させる。又刈り取りが終わった夕方稲木に吊るして干す。程よく乾燥すると持ち運びしやすい大きさに束ねて、田んぼの中にわらぐろを作り保管する。わらぐろは格好の日向ぼっここの場所となり懐手をした子供たちは風をよけてわらぐろに凭れ暖をとる。背中が太陽とわらの温かみで気持ちよい。藁の匂いが鼻をくすぐる。

刈り取った後の田んぼではタニシ拾いが始まる。くぼんだ人間の足跡の中には決まって大きなタニシがひそんでいる。この土地ではタニシを田貝といていた。拾い集めた田貝は持ち帰り熱湯で湯がき貝殻から貝の実を縫い針などを使って引っ張り出す。これをオカラなどと一緒に煮込むとおいしいおかずが出来上がる。こりこりと口当たりよく味もすばらしい。

稲の収穫が終わると百姓仕事も一段落。このあたりで小学校の運動会、続いて村民運動会が各地で始まる。親たちは寿司、玉子焼き、ゆで栗、炒った椎の実などご馳走を持って子供の応援に駆けつける。校庭に広げた藁の上で親子揃って楽しい昼ごはん。昼からはかぼっこや騎馬戦などに大きな声援が飛ぶ。日が西に傾きかけた頃閉会式。君が代や運動会歌を合唱して鉛筆、ノートなどの賞品をもらい家路につく。

家の行事が終わると農家は田んぼの藁ぐろをつぶして脱穀し、もみはカマス（藁で編んだ大きな袋）に入れ、藁は束にして又もとの藁ぐろを作り保管する。脱穀したもみは箆にこけて2週間ほど乾燥させる。乾燥の後、暇をみては庭先で粃摺りをして米にする。米は家の足踏み式臼（ダイガラといていた）か協同の水車小屋で白米にして食べる。早く白米にするために石の粉を入れる。太陽を一杯浴びた新米は炊き上がるとそこらじゅうにおいしい香りが漂う。

家の周りの畑では大根、白菜、しゃくしな、ちしゃなど秋野菜が大きくなり夕方になると親たちは野菜を持って下の川へ行き、きれいに洗って夕食の準備をする。各家とも土で煮たオクドと言うかまどに鍋や釜をかけて木を燃やして料理する。家の裏には山から

取ってきた枯れ木や割り木がきれいに積んである。大きく育った大根は川で洗って軒下に並べて干す。干しあがったものを母親が塩、ぬか、色付けの黄粉を使って大きな樽に並べて漬け込んでいく。一年間食べる漬物である。

秋の深まりとともに周囲の山々は紅葉が始まる。緑の濃い椎やならなど常緑樹に混じってもみじやうるしが点々と赤い灯がともったように赤色を増してくる。畑ではサツマイモ堀が始まる。奥深い山を開墾した畑ではサツマイモが沢山取れた。初めての山の土で作るとおいしいサツマイモが出来る。掘り出したサツマイモは藁で編んだフゴと言う入れ物に山盛りにし、天秤で担いで山の麓まで下ろしそこから荷車で家まで運んだ。

12月も終わりごろになると時々雪が降り、寒い冬がやってきたなと感じる。冬になると子供の楽しみは又増える。山で小鳥を取るのである。隣町へ行くと馬のしっぽで作ったワサ（小鳥を捕まえる道具）を売っており10個ほど買ってきて山へ入る。一面鬱蒼と茂った椎やならの林の中で空が透けて見える場所を探す。小鳥たちは逆にそう言うところから地面を見下ろして餌を探す。これを利用して上から見やすい場所へワサを仕掛ける。地面の葉っぱを押しつけて枯れ枝で丸く囲み、その中へ赤や青の木の實を枝ごと挿す。入り口へワサを仕掛けると小鳥は餌を食べに中へ入ろうとしてワサに引っかかり逃げられなくなる。学校から帰ると鞆を家に放り込んで一目散に山へ駆け上る。自分の仕掛けたワサを1つづつ見て周り獲物を回収する。小鳥が掛かっていると、ドキドキする。1日で2、3羽のつぐみなどが掛かっておりこれを見て回るスリルがなんともいえない。薄暗い林の中へ入りあっちこっちとドキドキしながら探し回る様子が今でも鮮明によみがえる。

獲物は毛をむしり料理して塩焼きにする。小鳥には塩がよく合う。焼くうちにじゅうじゅうと油がしたり落ちおいしい匂いがそこらじゅうに充満する。

中学生ぐらいになるともう少し大きい獲物をねらうようになり、はと、雉、やまどり、うさぎが相手となる。仕掛けは変わるがこれら大物の捕れたときは小鳥のときの3倍くらい興奮する。食べ物の少ない時代子供も自然に、自分で出来る狩を工夫する。これもまたこの上ない楽しみである。

当時山間部では結構雪も降った。一冬に数回はあたり一面真っ白になる。竹やぶに積もった雪は、大きな孟宗竹をしならせ音を立てて割れたりする。子供は竹を切り出しスキーを走って坂道で滑った。このようにして冬も楽しく過ごし春を待つのである。

平成16年2月記

楽しい畑仕事

田舎育ちのせいか土が恋しい。20年前ごろは神戸、北鈴蘭台に家を建てていない宅地があり弟たちと一緒にトマト、きゅうり、えんどう、大根その他たくさんの野菜を作り楽しんでいて、その土地を売ってしまったのでどこか貸し農園をと思い探していたところ、伊川谷の吹上で借りることができ、以来10年以上野菜作りをして楽しんでいる。

夏はトマト、きゅうり、じゃがいも、なす、豆、ゴーヤ、すいか。秋野菜は大根、白菜、きゃべつ、高菜、小松菜菊菜、にんじん、にんにく、とずいぶん多くの種類を作りこの時期野菜はほぼ自給自足である。全部自家消費できないので近所の人々に差し上げたり小松菜や高菜、大根の葉っぱは湯がいて冷凍保存する。大根は干し大根に加工しておく。こうするとものによってはほぼ一年中食べられる。一般に販売されている野菜は、農薬が残留しているものがあると聞くので、なるべく自分で無農薬で作った野菜を多く食べるようにしている。

畑まで車で20分、丁度6月の今頃は途中通る田んぼに植えられた稲が根付いて青々として生長してくる頃である。朝露を含んで成長の力を感じる。毎年この光景を見るのが楽しみである。

梅雨が明ける7月後半になると水やりが大変である。畑の近くに引いた溝からバケツ一杯水を汲み両手に抱えてそれぞれにまいていく。いつも5~6回往復する。結構良い感じになる。植物は正直なものでこうして水をやると途端にピンとなる。又追肥をやる。3日して見に行くと見違えるように成長している。指先ほどのスイカが握りこぶし位に大きくなり、また新しいのが大きくなりながら追いかけてくる。きゅうりも長さ30センチまで大きくする。歯ごたえがあつておいしい。トマトも日を追って大きくなり夏の日にさらされて赤く色づいてくる。7月から8月にかけてこれらを収穫する時期になる。これも実になって45日が収穫の目安といわれる。店で売っている大きさがらになり、帰って帰ろう、と畑に行く。あれー。大きなスイカがない。目の錯覚かと思つてよーく見ても大きいのがない。スイカ泥棒だ。悔しい。翌年は泥棒よけに側面に網を張り立ち入り出来なくした。これで大丈夫と思つて収穫に行くとまたやられた。よく見ると網が破られている。脚立などを使って上から侵入したらしい。もうこうなったらがんじろをしてやろうと、その翌年は天井にも金網を張ってどこからも立ち入れないようにし、手も太い針金でしっかり結わえ付け、素手では外せないよう対策した。それ以後泥棒はなくなつた。

スイカを作っている人も居り、聞くと毎年何個かやられるらしい。金額にしたらいいことはないが丹精込めて作ったものを黙って持っていかれるのはなんとも悔しい。被害はなく毎年手に持つとずっしりと重いスイカを5~6個収穫し楽しんでい

きうりも高知の田舎では大きくして食べる習慣であったのでそのままに大きくして食べる。小さいきうりを好むと言われる都会でも、大きいきうりが好きだと言う人も何人か出てきて毎年心待ちにしている。

野菜の本番はやはり秋である。まず夏の作物が終わると、鍬で土越しをする。きうり、トマトの根っこを取り除き乾燥させて燃やす。起こした畝に石灰をすきこんでいく。次に溝ごとに溝を作り野菜くずや草、落ち葉、牛糞、鶏糞など有機肥料を埋めていく。こうして床を作り1~2週間ねかして種まきをする。秋野菜は前にも触れたように大根に始まり葉菜、小松菜、高菜、白菜、きゃべつなど種まきやら苗を買ってきて植える。8月に種まきした大根も、9月ごろには20センチぐらいに伸びてくる。多少多めに種をまくので間引きをしながら収穫する。これを湯がいてみじん切りにし油で炒める。鰹節やちりめんじゅこを入れるととてもおいしい。余ったものは冷凍保存する。11月にもなると大根も大人の腕ぐらいの大きさになり自家消費、よそへ配るものを見繕って間引きの要領で収穫する。近所にも当方のファンが居り甘さと辛味が程よくお宅の大根でないとダメと言う人まで出る。自分で作った大根は確かに甘さを感じる。又きゃべつも生で食べるとパリパリと重ごたえがありかなり甘さを感じる。追肥には油粕と骨粉を醗酵させたものを使っているのでこれかなと思う。長年やっても新しい知識を隣の人からもらう。酸性になり過ぎないように、石灰などを混ぜて適度なアルカリ性にする。作物により酸性を好むもの、アルカリ性を好むもの、それぞれ個性がある。

白菜も大きくなりヒモで結ばなくても大きな玉に巻いてくる。寒さが来る頃自家製の味噌に土佐の名産、ゆの酢を使った鍋料理は灘の酒と共に一夕を楽しませてくれる。

このように畑仕事は作る楽しみ、収穫して食べる楽しみに加え人に喜んでもらえるのが何よりと思っている。

平成14年6月29日記

老友

シルバーカレッジ仲良しグループ B-B eクラブ

幼友達と言う言葉はよく使うが老友は聞いたことが無い。高齢化社会になり老人が増えると皆仲良く楽しく老後を過ごさなければならないと人は言う。

シルバーカレッジへ入るまでは会社の OB、仕事の関係でのお付き合い、学校の同窓会等、長いこと付き合ってきた友人とゴルフをしたり反省会と称して三宮で飲み会をやったりしてきた。

きっかけがあつてシルバーカレッジへ入学した。今までの経験を生かして社会、特にシルバーカレッジは神戸市の関係なので神戸市に還元すること。又友人を沢山作って一緒に勉強し仲良く交流すること。これが大きな目標のようである。

入学と同時に班の編成があり2班10名となった。途中手違いもあり結局2年生になっても班変えなしで我々2班も2年間仲良くさせてもらった。我々にとっては幸いなことであつた。1名退学したので9名で2年間過ごしたわけである。3年生になれば班変えをやるそうで、なにか名残惜しい気持ちになる。

1年生から積極的に交流の場をつくつた。明石への桜の花見、淡路へ一泊のハモづくし。上高地、乗鞍へ一泊二日の旅、その他三宮で事あるごとに反省会。飲み放題の店ありとの事で長田で反省会。皆気が合うので直ぐ計画が出来、直ぐ実行に移す。それもそのはず殆どが血液型 B 型だそう。

淡路ハモづくしの夜、自分達の部屋で12時過ぎまで話が弾んでいたようだ。こちらは早々と寝ていたが時々笑い声が聞こえていた。話の内容は血液型。飲みながらお互い確かめ合っていた様子。皆 B 型で先に寝た K さんは何型かで議論沸騰。血液型の当てっこで笑っていたらしい。翌朝聞かれ B 型だと分かると又笑い爆発。これだけ B 型が揃つたのは偶然にしても非常に珍しいことではないか。

それ以来班変えになつてもこの2班はユニークな名前をつけて存続させようと言うことになつた。B-B eクラブと名づけた。

「元気で仲良く」を地でいっているようなものである。シルバーカレッジへ入学してほんとに良かったと思うこのごろである。

おわり

平成 15 年 2 月 記

わらじ

今は大人から子供まで日常の履物は靴、つっかけ、スリッパなどで足指の間に入るものが何も無い。そのため足の色々な病気で困っている人も多いと聞く。田舎でも下駄、わらじを履く人は殆ど居ない。健康に良いのに何か勿体無い気がする。

昔は田舎では下駄、ぞうりが普通の履物で近所に行くのにも畑仕事をするのにもこれを愛用した。普段履きは藁ぞうり。何処かちょっと出掛けるときは皮ぞうり。これは竹の皮で作ったぞうりである。

最も多かったのが藁ぞうり。稲を脱穀した後藁を良く乾燥させ小さく束ねて、少し霧を吹きかけ木の槌でトントンと叩く。ぐるぐる回しながら叩くうちにだんだん柔らかくなる。ぞうり作りに適した軟らかさになると、藁のはかまをしごいて取り短いのも捨ててきれいな長い藁だけを集める。この藁で縄をない適当な長さに調整する。それが出来ると足を伸ばして座りあやとりの感じで足の親指にひっかけぞうりを編む体制にする。

かけやで打った藁は軟らかく鼻緒の部分から後ろのほうへ順次編んでいく。足の長さになったところで2本の縄を引き締めて、足の形になったぞうりに仕上げる。ピンピンはねた藁を鉋かナイフで切って仕上がりである。

ぞうり作りにも随分上手下手があってスマートに仕上げる人、不細工な人それぞれであるが出来上がったぞうりを履くのは何とも言えぬ温かみがあって良いものである。

ぞうりを履いて走り回ったあの頃が懐かしい。外反母趾とかややこしい足の病気は話にも上らなかった。

おわり

平成15年2月記

ひよどり

最近日本中で動物が人里や民家に頻繁に現れるようになった。神戸も例外ではなく「六甲の街中を猪が歩いていた。」「狸が親子で民家のゴミあさりに来る。」「狐が出没する。」「カラスは人まで襲うようになった。」話は尽きない。その中にひよどりの大群がいる。

ひよどりはもともと渡り鳥で冬にやって来たものがひよっとすると北へ帰らず夏でも見かけることがある。ひよどりで田舎を思い出す。

子供の頃ひよどりと言うと高知の田舎でも山奥に住んでいてミズキなど人里はなれた高い木の上で実をたべていたように思う。つぐみなど山へ入ると何処にでもいてワナなどでよく捕まえていたが、ひよどりは体も大きく子供達の憧れの的であった。大人も空気銃で撃ち落としたいが警戒心が強く近寄れない。家の近くの道路端に梅檀の大木がいくつかあり秋から冬にかけて実が真黄色に熟れ、これがひよどりの好物である。人里まで出てくるのはこの梅檀の実を食べに来る時くらいだ。大人たちはそれを狙い梅檀の木の向かい側の山に小屋を作りひよどりに悟られないように、覗き穴から空気銃を出して狙うが中々難しく打ち落としたところを見たことが無い。

そんなに警戒心が強くすばしこいひよどりが今はいくらでも集団で人里へ出てくる。神戸の街中でもモチノキ（くろがねもち）、南天など赤い実が熟れる頃は平気で人の庭先まで来て集団で食べつくす。昨日まで赤いきれいな実がついていたと思ったら今日はきれいになくなっている。こんな有様である。

毎朝公園で体操をする。大きく茂った楠や樫の木などでピーピー鳴きながら大勢ではしゃぎまわっている。体操している直ぐ近くの木々の枝にも止まって暫くじっとこちらの体操を見ている。愛嬌もあるので毎朝見ていて楽しい。昔をおもうと随分馴れ馴れしくなったものだ。結構、結構。

おわり

平成15年1月 記

悪童

40歳を過ぎた頃より人間に丸みが出来てきた。円満になったとよく言われるようになった。自分でもそう思っている。土佐のいごっそうがが変ったものである。思い出すと不思議である。

物心ついたころはそんなに短気で泣いたりわめいたりした記憶はないが（赤ん坊の頃は覚えていない）小学校三四年頃からよく喧嘩をするようになった。些細なことで友達と喧嘩になりよく取っ組み合いもしたように思う。授業中でも隣の子と直ぐ喧嘩するので女のT先生が廊下で立っていなさいと引っ張りに来る。こちらは机にしがみついて動こうとしない。先生は無理やり引っ張る。ずるずる机ごと引っ張られるので先生の手を噛み付く。クリームの臭いが鼻にぷんとくるがそれどころではない。女の先生では手に負えないので男の先生を呼びに行く。W先生は血相を変えて入ってきて腕力に任せて引っ張っていく。行き先は決まって2階の職員室である。立たされてタバコ臭い手で一発平手打ちを食らう。子供ながらに怖いので神妙にする。度重なるのでW先生はいつも僕の肩につけている黄色の副級長を取り上げると言う。引きちぎらんばかりに手で引っ張る。挙句その時間中職員室の隅に立たされる。時間が来ると謝って教室へ帰される。

校庭でいたずらをするすると校門の正面に立たされる。皆の見せしめである。友達は又今日も立たされていると言いたげにニヤニヤしながらそばを通る。僕は6人兄弟の長男で弟達は早く家へ帰って親に報告をする。何食わぬ顔で帰ると親から大目玉を食らう。

男の友達だけでなく女の子にもいたずらをするので始末が悪い。女の子にもてないからやけくそでしていたかもしれない。学校帰りも先回りして、土橋の下に隠れ女の子が通りかかると、穴から棒を突き出してびっくりさせる。このときは一緒に帰る男友達を誘う。女の子の親からはいやな目で見られる。学校帰りの途中国道の上まで枝を伸ばしたムクの木がある。秋にはその実が熟れておいしくなる。小鳥も食べに来るが子供たちも木に登って食べる。ムクの木は粘り強く折れないので、みんな枝の先のほうまで行って猿の子よろしく実を採る。下を通る人が危ないから降りろという。こちらは食べるのに夢中になってるので中々やめない。そのうち弟たちが通りかかる。家に帰って親に言いつけるので、その晩は大変である。

こうして旧制中学に入った。方々から集まってくるので体の大きいやつ、喧嘩の強そうなやつがごろごろしている。こちらは体も小さいし根性も無いので手も足も出ない。仕方なくおとなしくしていたように思う。当時は中学生の喧嘩もかなり派手にやっていた。棒でたたき、自転車のギアの歯車ははずしてそれに長い紐をつけてぶんぶん振り回す。鎖鎌でまねか。中には刃渡りの少し長いナイフを忍ばせる。皆はこれをドスと言っていた。子供なりに人を脅す工夫をしていたものだ。しかし当時はその場限りでさっぱりしていた。

僕はこのような度胸もないし体力もないのではただ見るだけであった。ただ思うにこれらは半分は遊び心のようなもの。もっとはっきり言えばとことん相手を傷つけてやろうと言う陰湿さは無かったように思う。戦時中のこととて多少遊びも行き過ぎの感はあるが今の世代のごく1部にある全く見境のない行動はとらなかつた。

さらに新制高校編入後は女子が多かったせいもあり子供同士の喧嘩は殆ど見られなくなった。みんな大成した大人の感があった。それだけ戦後平和になったか、男性が女性化したことか。

大学も働きながら勉強する夜間部であり、又20歳を過ぎれば喧嘩でもないであろう。

ところが会社へ入ってからまたまた土佐のいごっそうか、正義感が頭をもたげ正しいか、正しくないか、正しくないことは許せない。こんな気持ちの血気盛んな青年になっていた。よく仕事の上で他の部署の人々と正義を通そうと口論が絶えなかつた。又おなじ職場内でも同僚や先輩とよく衝突した。幸い良い上司に恵まれ大きな問題にならずにすんだ。

大きな転機を迎えたのは子会社の代表になってからのことである。

42歳になり最初の関係会社を担当した。社内には親方日の丸のたるんだ空気が充満し、これらを改善するために毎日カリカリし通しであった。おかげで血圧も上がり、体調を崩すこともあった。しかし何十人かの従業員を預かる会社の責任者になると其のまま感情を表に出すわけにもいかず、又よく考えると経営者は感情に走ったら落第だと常々思っていたので忍の一字で自重しとことん話し合いで問題解決を図った。おかげで会社も健全化が出来たので、次の関係会社の再建を任された。

2番目の関係会社でも目に余るたるみようで毎日が血圧の上がりっぱなしの状態となったが自らが範を示し教育をした。但しジェスチャーで怒鳴りつけるのはむしろ教育としては好ましいことだと思い実行した。従業員にも自分の真摯な気持ちが通じ、全社一丸となって努力し、赤字の会社が配当会社に生まれ変わった。5年の任期を経てみんなと別れるときは、女子従業員までが涙を流してくれた。一生のうちで最も充実し感激した時期である。

子供のころの悪童ぶりは何処かへ消えてしまった。ある意味で土佐つぼの面目丸つぶれである。不思議なものである。

こうして年と共に人間は丸くなり腹を立てなくなって随分成長したと自分でも思っているが、実のところ人に言わせるとそれだけの元気が無くなっただけのこと。喜んでいいのよ悪いのか。

おわり

平成15年3月 記

はったい粉

最近はったい粉という言葉も殆ど聞かれなくなった。

今から50年前。高知から神戸へ出てきて西灘の友人、箭野孝彦君（故人）の家に1年ほど居候させてもらって学校へ通った。水道筋商店街に近く、付近には大きな市場がいくつもあって、生活には至極便利なところであった。その頃、家の前の道路には物売りがよく来てマイクでなく生の呼び声が聞こえた。リヤカーに竹の物干しを一杯積んで生ぬるい声で「竿だき」「竿だき」と呼んでいる。これは男の売り声である。竿竹が竿だきとなるのである。その竿竹も本物の竹で作ったもので、定尺に切り節周りを削って角を取り洗濯物が干しやすくしてある。今ならホームセンターで伸縮自在の使いやすい塩ビ製品を売っているが、当時は竹の竿が貴重品で街角で結構売れていた。買ってからも大事に使いひび割れて使いにくくなると、ビニールの筒をかぶせ熱湯をかけると瞬時に竿竹にぴったりくっついて又何年か使えた。

それにもうひとつ良く売り声の聞こえたのがはったい粉である。これも眠たそうな声で「麦茶とはったい粉」。こちらはお婆さんの売り声が普通であった。見るとお婆さんが手ぬぐいをかぶりブリキ缶の大きな容器を背負い地下タビを履いて歩いて売りに来る。この辺りは庶民的な町であったので買う人も結構いたように思う。窓からそんな光景を見ながら田舎を思い出す。

昭和20年代高知の田舎ではまだ原始生活を想像させるような道具や習慣が一杯あった。収穫した米は共同で作った本物の水車小屋や各家庭にあるダイガラと呼ぶ石臼で搗いでいたし粉引きは石臼がちゃんと役に立っていた。大麦と大豆を少し焦げ目が出来るぐらいに鍋で炒り、石臼で粉にする。母親が上下に分かれた重たい石臼を縁側に持ち出してきて、炒ったばかりの大麦と大豆を石臼の上蓋に載せる。一箇所穴が開いておりそこから材料が上下の石臼の間に出る。取っ手がありこれを引いて回すと上下の摩擦で穀物は粉になる。母が取っ手を持って回す。一人の子供が取っ手に手を添えて回すのを手伝う。別の子ども上蓋に盛ってある穀物を少しづつ穴に落とす。この三人の呼吸がうまく合わないと石臼の上下がずれたり穀物が入りすぎて粉が荒くなったりする。母がもう少し力を入れてとか入れる量を少なくとか言いながらだんだん石臼の下に粉がたまっていく。中に粗い粉が混じるとどうして通して粗いものだけもう一度石臼で挽く。こうして出来たのがいわゆるはったい粉である。子供たちは待ちかねてその粉を弁当箱などの容器へ入れて砂糖を混ぜて食べる。スプーンなどしゃれたものは多い兄弟全員に当たるほどないので家の裏の木の葉や椿の葉っぱを取ってきてそれですくって食べた。食べ物の少ない時代これは味もよく又栄養もあったので時々こうして食べた。

乾燥した粉をそのまま食べるので口に放り込んで咳き込んだり、口に含んだまうっ

公園の椿

今朝、平成20年1月2日午前7時。正月も普段どおり近くの公園で、30分間の自己流体操とウォーキングをする。葉を落とした桜の木も寒さに震えている。この公園も松林を伐採して住宅を造成したときに作られたもので、もうかれこれ50年になる。50年の歳月をかけて当時植えられた木々は大木になった。楠、桜、榿、ウバメ榿、ヤマモモ、椿、クチナシなど樹種も多い。楠も大きいのは二抱え以上ありそうだ。大きく伸びた木の枝は、大げさに言えば天を覆うほどで、夏場は日陰になったこの木の下ベンチに座れば涼しいひと時が過ごせる。

この公園も二段になっており、上の段、下の段、その間に40段ほどの石段で結ばれている。上の段は一段高くなっているため、明石海峡大橋や淡路島、遠くは紀伊半島まで一望できる。自己流体操の後、この石段を2段とびで駆け上がり公園を3周する。この運動を始めて27年になる。歩きながら四季折々の変化を楽しませてもらう。丁度今1月は少し早いですが白い椿が咲き始める。色とりどりの花の咲くちょっとした椿の林になっている。咲く花も白から次第に赤やまだら模様のものへと移り、4月頃まで咲く。林の大部分はやぶ椿で人間の手で作った椿の派手さはないが、小柄な赤い椿は心を和ませてくれる。

椿が終わり春の陽気が漂い始めると、待っていましたとばかりに桜の花が咲く。この公園の周囲に20本以上もある大木の桜が満開になると、見事である。花見をしながらウォーキングをしていると、いつの間にか甘酸っぱい匂いがしてくる。クチナシの花が咲き始めたのだ。クチナシの花は梅雨時分まで長いこと楽しませてくれる。

6月になるとやまももの実が熟れる。子供たちが木に登り食べに来る。こちらも時には味見をさせてもらう。子供の頃田舎の山で口の周りが真っ赤になるほど食べたことを思い出す。

夏が過ぎるといつの間にか椿には小さな実がいっぱいなるがまだ青い。葉も実も夏の太陽に照らされて光り輝いている。生き物の生気そのものを感じ、たくさんの元気がもらえる。日を追って実も大きくなり、秋になるとはじけて実と殻がそこらあたりへ飛び散る。歩道の両側はどんぐりと一緒に椿の実がごろごろ転がっている。こんな光景を見ると昔の田舎を思い出す。

家の庭先に大きなさざんかの木があり、秋になるとたくさんのさざんかの実がはじけおちる。これを拾い集めると親戚の叔母さんが油を絞ってくれる。椿の実と一緒に油をとるので椿油で通っていた。絞り終わると一升瓶に詰める。大きな饅頭のような硬い絞りかたも一緒にもらってくる。油は椿油として女の人の髪に付ける。光沢のある、いわゆる烏の濡れ羽色になり、いっそう色っぽい田舎の美人になる。油粕も細かく砕いて髪洗いに利

用されていた。

椿の花は子供の頃、紐を通してじゅずつなぎにし首飾りとして遊んだ。椿の花を見てこんなことを思いながら、毎朝体操とウォーキングをする。地面の土からの精気と上からは大木の枝、葉っぱから降り注ぐ精気とで気分爽快になり、これからの1日の元気がみなぎってくる。

おわり

平成20年1月2日 記

故郷の細道

たまに故郷の高知に帰ると緑の山、田んぼや畑、道路など懐かしい自然が目の前に一杯広がる。山の緑はその季節に帰ると、目の覚めるような若葉に燃える。田んぼの畦道は一面の花盛りとなる。たんぽぽ、きんぽうげ、レンゲ。赤、黄、白、色とりどりの花が咲き誇る。小学校低学年。覚えてたの「春が来た、春が来た、どこに来た、山に来た、里に来た、野にも来た。」お兄さん、お姉さん、それに弟や妹たちみんなで歌いながら田んぼ道を歩いた。小さい子供たちは花を摘みながら後をついてきた。

家の近くを国道33号が走る。当時交通量はごく少なく、たまにトラックなどが走っていく。人々は主として各家の近くを通る、いわゆる旧道を生活道路にしている。旧道は人、牛馬、荷車、自転車などが通れる程度の狭い道。この道が長く伸びて峠を超え、隣町まで通じる。何十年ぶりにこの変わっていない細道を昔の感覚で歩いてみる。橋を渡る。この橋の下は昔魚のよくつれた場所だ。物心ついた頃からみようみまねで毎日のようにハエ釣りをした。今も魚は泳いでいるがこれを釣る子供は見かけない。少し行くと高台に大きな家があり2つ年上のKちゃんのうちである。親戚の家である。高い石垣の横には谷川がすべり落ちてくる。ちょっとした滝である。夏場大雨の後など水しぶきを上げて流れ落ちる。この近くへ行くと水しぶきと風圧でひと時涼しい気分になる。秋には上流から栗の実が流れてくる。水に浸かりながらたくさんの実を拾って帰った。しばらく横の田んぼを眺めながら行くと2、3軒の家。学校友達、K君やTちゃんの家である。今はどうしているだろうか。Tちゃんは亡くなったと聞く。一軒の家は荒れ放題の様子。もう誰も住んでいないかもしれない。左には迂回した川が流れ国道へ出る橋がある。川向の高台にはAちゃんの家が見える。Aちゃんは2つ年上で大の仲良し。学校へ行くのも魚釣りをするのもいつも一緒だった。Aちゃんも1年前に亡くなった。この橋の下の石垣では、うなぎがよく釣れたところである。石垣の状態が昔と変わらず、今にもうなぎが出てきそうである。これを横に見ながら行くと大きな岩に古い蔦がからみつき、中に小さな祠がある。石神様である。昔はもっとすっきりしていたが今は少し荒れている様子。昔を思い出してお参りしていく。これを過ぎてしばらく行くと山が旧道に迫ってくる。このあたりの山の斜面で滑り台代わりに滑ったものだ。その向こうには又5、6軒の集落。いづれも知り合いの家であるが、増築されたり建て替えられたりで昔の知り合いの人が住んでいるかどうかわからない。あまり人の気配がない。道の左側には親戚の人が住む家があったが、今は家そのものがない。荒れ放題になっている。戦時中にここへ帰ってきた人なので、都会へでも又出て行ったかもしれない。又少し行くと右上に昔のM君の家がある。今は廃屋になりその面影はもうない。M君といえば戦時中旧制中学で、毎朝一緒に汽車通学し勉強の話でも割合いいレベルの高いまじめな話が多かった。それが昨年帰省の折、杉林の中へ入り一面に自生

しているモチユキ草の花を見ていると、下のほうから杖をつき腰の曲がった90歳過ぎのおじさんが上がってきた。田舎のことだから名前を聞けば分かると思い、尋ねるとなんとそれはM君である。あまりの変わりように呆然とした。しばらく昔話をして分かれた。まもなくM君も亡くなったそうである。懐かしい同年代の幼友達もだいぶ減ってきているようである。

さらにその先には広い桑畑があったが、今は殆どの畑が家に変わっている。10軒ほどだろうか。家には知り合いのおじさん、おばさん、又学校友達が住んでいた。あまり人影がないのでみんな出かけているのか。この集落の最も奥に行くと、それから先は人家のない山道を通り、峠を超えると隣の町へ出る。今来た方をを振り返ると昔懐かしい光景が一望できる。みどりの山に抱かれた家々がそこに見える。この部落に住み隣町へ行くために何度この旧道を通ったことか。昔を偲びながらしばらく眺めていた。

おわり

平成20年1月19日 記

ダイガラ

足ふみ式の石臼のことである。昔のほとんどの農家の納屋にダイガラが据えてあった。石臼、木材を柱より大きめ、2メートルぐらいの長さに切り、その突端に木製の杵が付いている。手元には足ふみ台があり、手すりにつかまって体重をかけると先端の杵が高く持ち上がり、足を離すとドスンと杵が石臼の中へ落ち込む。テコの原理を応用した農具である。

昭和20年代まで農家ではこのダイガラで玄米を白米にしたり餅をついたりしていた。15キロ程の玄米を入れイシコ（石の粉）加えて1時間ほど搗くと白米になる。家族が1週間ほど食べる量である。普段は大人がこれで米を搗くのであるが時々子供達に手伝わせることがある。子供1人では体重が軽く先端の杵が上がらない。子供は2人がかりで作業をする。遊び盛りの子供も田舎ではお手伝いが多い。しばらく搗くのをやめて子供同士で遊んでいると帰ってきた親からお叱りを受けていた。よくある懐かしい光景である。

このダイガラのもう1つの仕事は餅つきである。当時田舎では年2回、新正月と旧正月を祝っていたので、年末になると一家総出で正月の餅搗きをする。小型の木の臼に手に持った杵で搗くより重力が大きいので早くきれいに餅が仕上がった。

2月頃旧正月にも同じようにこのダイガラが餅つきで力を発揮する。

そのうち人々はダイガラから次第に自然の力を利用するようになり、共同で水車小屋を造り一度に5、6軒が同時に米搗きができるようになる。またさらに進んで村に1、2軒電力を利用して米搗きができるちょっとした精米工場ができるようになり、人間もずいぶん楽になってきた。これも昭和20年代、終戦後のことである。

おわり

平成20年10月15日 記

追記：中国福建省の田舎にダイガラそのものがあった。

NHKテレビ 世界遺産の番組で福建土楼を見た。15世紀ごろ作られた円形、土

造りの3階建集合住宅。中央に広い中庭があり50所帯、約100人が生活している。このような円形集合住宅がその集落にはいくつもあり、世界遺産にふさわしい雰囲気を醸し出している。現在住人は老人、女性、子供がほとんどで若い男性は都会に出稼ぎに行っている。親は子供に教育を受けさせ、都会へ出て良い生活をさせようとする。出て行った若者はめったに田舎に帰ってこない。

東南アジアの国で就職し結婚直前の若者が写し出された。間もなく故郷の村に帰り結婚式を挙げる。式前日若者の親はもちろん、近所の人々が中庭に集まって結婚式の準備をする。その中にダイガラが出てくる。中国語でなんと叫ぶかわからないが、日本の昔のダイガラそのものである。女性、子供が共同してこれで餅をつき、結婚式の御馳走に添えるようである。これを見るとダイガラのルーツは中国かなと思う。結婚式が終わると2人は東南アジアの国へ帰って行った。

平成21年1月25日

土佐弁

生まれ育った高知の田舎を後にして50年が過ぎた。ほとんど大阪、神戸で仕事と生活をしてきた。途中故郷の四国の関係会社や東京にも勤務したが、子供のころ身に付いた言葉は恐ろしいもので、土佐のアクセントは一向に衰えない。東京勤務の時も、新橋や赤坂で一杯やることも多かったが、隣で土佐弁を聞くとこの人もやはり同じだなあと、また高知出身の人からあなたは高知ですね、と言われてたりで自分ではその土地の言葉にある程度なじんでいると思いながら、実態は土佐弁丸出しのことが多い。

仕事で各地を回るとその土地の方言に接する。鹿児島や東北ではかなりきついなまりがあるので、意味が十分理解できないものが結構ある。また和歌山へ行くと、どこか土佐弁に共通する言葉を聞くことがあり、なにか懐かしさを覚える。四国山脈にさえぎられて土佐から外へ出る場合、船で行くのが便利で、早い時代があったと推測する。また嵐などに会って漂着するのは、和歌山あたりではなかったろうか。

最近はマスコミの影響もあり、故郷に帰っても我々が子供のころ使っていた方言が少なくなって、何か寂しい思いをすることがある。

子供のころを思い出し当時使われていた方言を その1.「大人と子供の会話」その2.「土佐の方言、思いつくまま」をここに収録してみた。

その1. 大人と子供の会話

「おんちゃん和孩子」

近所のおんちゃんたちが連れ立って、川からバケツを重そうに下げて上がってくる。

子供はそれをみて、

「おんちゃん、それ何ぞね。」

「ゴリ押しをしてきた。いっぱい捕れたぜよ。」

「まっこと、たまるか、ようけおる。こんなにビス（ごり）がおったかよ。」

「なんぼでもおらあよ。今日は天気も良いし、こじゃんとやった。」

「こんなにようけ捕ってどうするぜよ。」

「ゴリ汁にして一杯やらあや。おんしんくのおやじは居るろうか。いっぱいやるけに来るように言うちよいてくれ。ちょうどつつじも満開で花見をかねて。」

「仕事やめておんちゃんくへ来るようにゆうちよかあよ。御馳走をいっぱい作っちょいとうせ。」

隣のおんちゃんも御馳走つくり合流する。

「またようけ捕れたねや。」

「なんちゃあー、一時間ばあでこればあ捕れたがや。」

「ええビスが揃うちよる。今日ほうまい酒が飲めるねや。」

「おんしらあも、見ちよらんとはよう手伝うてくれや。」

近所のおんちゃん達はゴリ汁や煮物の御馳走をみんなで一生懸命つくる。

「ちょうどええ味になっちよる。酒はまだかや。」

「今沸かしゆうけに、ちくとまっとうせや。」

「早うせにゃ辛抱できんが。」

「酒も沸いた。ゴリ汁で、はよう飲もう飲もう。」

おんちゃんやおばさんがようけ集まって、わいわい、がやがや。宴もたけなわになる。

その2. 土佐の方言、おもいつくまま

別紙添付一省略

平成20年10月20日 記

土佐の方言

思いつくまま

高知県高岡郡加茂村（現佐川町）

1950年（昭和25年）頃まで

あっぱい（幼児語）	きれい
おっくう（幼児語）	おくすり
あて	わたし
あしんく	私の家
あるにかわらん	あるらしい
言うたちいかんちや	そんな事言っても負けないよ
言うちゃあせんぜよ	言っていないよ
いくかよ	行くか？
いぬる	帰る
いやちや、しなちや	いやだからしないで
いんげの	どういたしまして
うつらん	伝わらない
うっとりへん	無関心、知らん顔
うんとええ	ものすごく良い
えずい	悲しい
おこつる	いたづらをする
おかやん	お母さん
おじやん	おじいさん
おせ	大人
おとやん	お父さん
おばやん	おばさん、おばあさん
おまん	あなた
おまんく	あなたの家
およけない	気持ち悪い
おんちゃん	おじさん
かわっちゅうにかわらん	変わっているらしい
かやる	倒れる
がंगा（幼児語）	魚の骨
くつろぐ	ほっとする、安心する

くする
来ちよらあね
来ちよるぜよ
来るかよ
くるめる
くのうを言う
ぐじゃる
ぐっすり
げっとう
けんぜん
こうべる
こじゃんと
こみこむ
事にせん
さで出す
してちや
しでる
しなや
しなちや
しまかにやる
しょうりき
しょうまっことやれん
しゃんしもうた
じけ
しんでる
ずびこむ
たいちやあかまんろう
たまるか
だきな
ちくと
ちゃまがる
ちんがり
つくなむ
づかれる
つつく
つぼさ

煙が出る
来ているよ
来ているじゃないの
来るか？
仕舞い込む
文句を言う
ぐらりと倒れる
ねこそぎ
ぴりっこ
絶対
おしやれをする
とことん
はりきる
問題にしない
放り出す
してください
いじめる
しないで
もういや (やめて)
まじめにやる
本当に
ほんとに困ったものだ
惜しいことをした
だし
供える
もぐりこむ
多分かまわないだろう
えらいことになった
汚い
ちょっとだけ
壊れる
ちょっとの間
しゃがみこむ
叱られる
触る
網

てにあわん	手に負えない
てんごのかあ	いたずら
てんぼうな	無鉄砲な
でこ	人形
といと (幼児語)	鳥
どがにするかや	どんなにするか
どくれる	ひがんでやけくそになる
どだいしょういかん	どうしようもない
どだいむり	ぜんぜん無理
なよい	易しい
なんちゃあ無い	何にも問題ない、いいですよ
なんちゃあなんちゃあ	いえいえどうして
ぬんだ	伸びた
ねぶる	舐める
ねや	ねえ
のおがええ	具合が良い
のしい	しんどい
ばっさり	一気に
ばっぼ (幼児語)	お餅
はんし (幼児語)	裸足
ひがち	一生懸命
ひきべち	区切り
びちくる	ばたばた暴れる
ひっしゃくる	ひったくる
びんび (幼児語)	魚
のかな	のんきな
ひったいばっち (幼児語)	あせびの花
ふさぐ	失神する
ふすべる	煙で燻す
ふつくる	懐
へんしも	早く
ほいと	乞食
ほけ	蒸気
ほたえる	騒ぐ、暴れる
ぼっちり	丁度
ぼっこり	不意に

ほのく	周囲が暑くなる
まぜくる	かき回す
まっことたまるか	ほんとに大変なことになった
まっぼが暗がる	目先が暗くなる
むさい	汚い
めご	羊歯で編んだ籠
めった	参った
めっそうな	大変な（良い意味）
めっそうもない	とんでもない
もげちゅう	千切れてる
もじゃくる	ぐしやぐしやに丸める
もんでくる	帰ってくる
へこい	ずるい
へごうな	良くない、つまらない
へち	方向違い
へんしも	早く
りぐる	もったいをつける
やしべる	軽蔑していじめる
やちがない	しつこい、不合理な
やれんぜよ	どうしようもない

剣山へ登る

神戸を車で出発して約2時間。四国、徳島道的美馬インターで降り、吉野川を渡る。しばらく行くと剣山への登山口に差し掛かる。登山を思い立ったのはもう10年も前のこと。宮尾登美子原作「天涯の花」を読んだ。剣山周辺を舞台にした、淡い恋物語である。その中に剣山に自生する「きれんげしょうま」の花のことが出てくる。図鑑で調べると黄色の、そんなに派手ではないが、なにか魅力的な花。剣山の特定の場所にしか咲かないこの花を、ぜひ自分の目で確かめたいと、8月初め女性を含む6名の仲良しクラブのメンバーで出かけた。

吉野川支流の、澄み切った水の流れを見ながら狭い山道を登ること1時間余り、途中道幅が狭く、対向車とのすれ違いも難しい。やっとの思いで標高1,500米に着く。広い駐車場があり、そこに車を止める。レストランや土産物屋などが軒を連ねる。ここは見越という。道端に山からの水をホースで引いて流している。柄杓ですくい口に含むと歯にしみるほどの冷たさ。のどの渇きをうるおしてくれる。リフトに乗り約20分、1,700米に着く。ここから300米ほどの登山道を歩いて登る。

途中きれんげしょうまを見るために登山道から横道へ入る。20分ほどで現地に着く。ちょうど今8月上旬が花の見ごろである。足場が悪いのでずるずる滑る。写真を撮るのにも一苦労する。1米ほどに伸びた細い茎に、子供の手のひら大の緑の葉が茂っている。その枝の先に5センチ程のラッパ状の黄色い花が、鈴なりに咲いている。他の花のようにパツと大きく開かず、8分目開いたのがこの花の満開なのである。この黄色い花が険しい谷一面に咲いた光景は、うす暗い谷間に豆電球が灯ったような神秘的な感じである。やはりこの花を見ようと大勢の人がやってくる。近くでの花の観察は先の一団と交代することになる。

キレングショウマの感動を心に刻み、またもとの登山道へ戻って頂上を目指す。さすがに2,000米近くになると見晴らしが良くなる。天気にも恵まれ四方の山がすぐそこに見える。遠くに鳥取の大山らしき山が見える。ときどき小休止を兼ねて、カメラのシャッターを切る。頂上目掛けて登る人、下山してくる人、お互い道を譲りながら挨拶をかわす。

重い足を引きずりながらやっとの思いで6名全員無事頂上にたどり着く。意外と女性の足が軽く元気である。1,995米。あちこちから歓声上がる。ここは平家の馬場といわれるだけあって、平地が広がっている。歩きやすいように木の歩道が四方に巡らせてある。南に太平洋が見渡せ、涼しい風が吹き上げてくる。胸いっぱい深呼吸したい気分。よくぞ登ってきたと満足し納得する。頂上にも高山植物の花に交じって「きれんげしょうま」「お

みなえし」などいろいろの花が咲いている。頂上の冷気を含んだおいしい空気を、体中にしみわたらせて下山の途に就く。見越までリフトで降りて近くの剣神社にお参りする。小説「天涯の花」の主要な舞台にもなっている。社殿に続いて参拝客宿泊棟が並んでおり、小説のイメージそのままである。

しばらく休憩ののち、朝登ってきた方向と反対の南側の下っていく。途中かずら橋に立ち寄る。ここは昔からあるかずら橋のはるか上流に、全く同じ橋が10米間隔で2本架かっている。周囲はうっそうと茂った原始林の中で、大自然にうまく溶け込んでいる。水量も多く程よいせせらぎの音を聞きながら、足を踏み外すまいと懸命に対岸へ渡る。かなり大きく揺れるのでスリルが恐怖心が変わる。

かずら橋を楽しんだあとは一気にホテルへ直行。東祖谷温泉郷である。第3セクターで運営する一軒だけの温泉宿。ほとんどその付近の木材で作られており、実に落ち着いた雰囲気がある。大浴場でゆっくり湯につかる。無色透明の単純温泉らしい。登山の汗を流し気分爽快。風呂からあがると、レストランに直行し冷たいビールで乾杯。山の幸、海の幸に舌鼓を打ちながら歓談する。付近には他に家らしきものがないので外は真っ暗闇である。酔いざましに木造りのバルコニーに出ると、星星が鮮明に見える。こんなきれいな星空を見るのは何年振りだろう。涼しい山の風が吹き抜けていく。

明日は吉野川沿いにドライブしながら神戸へ帰るか、いろいろ考えながら眠りに就く。

おわり

平成20年11月 記

食生活の今昔

昭和10年頃の田舎の食生活

食の安全、食育などの言葉が、このところ頻繁に語られるようになった。我々シルバ一が子供のころ、とても想像すらできなかつたことである。また老人学校でも教材に取り上げられることが多い。この機会にわれわれの子供のころ、昭和10年代の食について思い起こしてみたい。

我々が育つた昭和10年代、高知県の田舎では、すべて自然の中で自然と共に成長してきたように思う。

最初の子供であつたので、生まれて誕生頃までは、ほとんど母親の母乳で育ててもらつた。兄弟も多く下の弟や妹の時代になると、母乳の足りない時は、今のように市販の粉ミルクがふんだんにあるわけではないので、足りない分は大きな釜で、御飯が炊きあがるころを見計らつて、小さな竹かごを差し込み、その中へ浸み出したおもゆを補助的に子供に与えていた。雑貨屋でこのかごを売つていたので、各家庭で似たようなことをしていたと思う。誕生近くになるとすこしづつ離乳食に移行していく。おもゆに米粒が増えていく。また牛乳や市販のビスケットなども食べていた。成長とともにお粥が濃くなりその中へ卵や白身の魚、ほうれんそうなどをすり鉢で、すりつぶして混ぜ、栄養価を高めていた。子供はよそ見をしながら、親に叱られながらおいしそうに食べ、ぐんぐん大きくなり、次第に普通食に移行していった。米は父が国鉄勤務であつたため、その売店より買い、魚は村の魚屋や近くの漁港から魚売りが来る。肉は国鉄の売店か、屠殺場で仕入れてリヤカーで帰る隣村のおじさんに分けてもらつたりで、育ち盛りの小学校時代は、貧しいながらも栄養的に不足することはなかつた。

小学校卒業後の戦中、戦後は食糧難の時代に入った。非農家の我が家は、野菜類は自給自足でまかなえたが、米は配給を受けていた。少しばかりの米を、さつまいもや里芋と一緒に炊いて食べた。さつまいもも干して保存食にし、年中、米の代用として重宝した。また変わり種はどぐり粉である。どぐりを工場であく抜きして粉にし、まんじゅう代わりに加工して食べたが、おいしい食べ物ではなかつた。我が家では家族が多いのもっとも大切な米が不足する。食糧統制の時代ではあつたが、近所や親せきの家ですこしずつ分けてもらった。いわゆるヤミ米である。この頃が食生活の最も貧しい時期であつたが、幸いみんな成長し当時の子供も現在の長寿社会を生きている。そのうち父が中国から引き揚げてくると親戚から田圃を借りて米つくりを始めた。

畑で作る野菜のほかにも自然の恵みを、存分に利用させてもらつていた。家の周囲には柿、くり、梅などそれぞれの時期になると枝もたわわに実り、毎日のおやつなどに供された。春から夏にかけては山から、からたちの葉っぱを取つてきて柴餅（柏餅）を作つた

り、冬は餅つき。豆や青のり、旬のものを混ぜて餅をついた。また四季を通じて巻きずしや、ちらし寿司を作り楽しんだ。

家の周囲の果物や、畑や田んぼで収穫できるもののほかに、川や山の幸を食生活に取り入れた。川ではうなぎ、かにや小魚を釣って食べるし、山では小鳥や、ヤマドリ、うさぎなどの狩をして一家団欒の御馳走に供した。

食べ物の生産について少し触れておきたい。主食の米はそれぞれの農家が田んぼで苗から作り、整地した田んぼに、牛糞や草を刈って作った堆肥を、すきこんで田植えをする。化学肥料も一部磷酸や石灰を使っていたが主体は有機肥料。これで結構分結し大きく育ていった。途中草は人力で取り除き追肥をやる。真夏にはいつくばっての草取りは大変な苦勞であった。出穂時期になると田んぼのあちこちに誘蛾灯が灯され夜間、光に寄ってきた害虫の蛾を駆除していた。それでも穂が出て安心してると、突然円形に枯れる場所がいくつか出てくる。子供達も総動員で田んぼに入り害虫駆除をしていた。

こうして10月頃になると待ちに待った実りの秋がやってくる。一面の黄金の風景が秋風とともに気持ちよい。一家総出で鎌で稲刈りをする。何とも言えない満足感に浸るときである。刈った稲は数日間田んぼで寝かせて乾燥し、一旦2メートルぐらいの高さに、円形に積み上げる。これをクロと言っていた。稲刈りが終わる頃、このクロを崩して脱穀をする。足ふみ脱穀機を使ったり、部落に1台ある石油発動機つき脱穀機で粃にする。この粃を庭に広げた筵で天日干しをする。毎日朝広げて夕方には納屋にしまいこむ。これを1週間繰り返して完全に乾燥させる。藁は小さな束にして田んぼで干し上げ農作業の道具に加工する。また余った藁は堆肥に利用する。干した粃はカマスに入れて物置に保管する。時期を見て粃すりをする。部落に1台ある発動機つき粃すり機で玄米にして保管する。玄米は部落共同の水車小屋か、家の軒下にあるダイガラと称する石臼で白米にして食べる。現在に比べるとずいぶん手間はかかっていたが、その分自然のおいしい米が食べられたように思う。

野菜は家の周囲にある段々畑で大抵のものを作る。秋野菜はきゃべつ、白菜、大根、ほうれんそう、菊菜、ねぎなどほとんど自分で作る。これら野菜の肥料も堆肥、牛フン、また人間の排せつしたものも、便所からくみ上げて肥料にする。人体に害のある肥料はまづ使うことはなかった。ただ人糞を使うと回虫の卵が野菜につき、再び人体に入って、薬で駆除しなければならなかった。

また夏はカボチャやきゅうり、ナス、とまとなどすべて自家生産する。カボチャは家の庭先の畑で育て大きくなると、背丈を上回る高さの頑丈な棚を作り、これに這わすと南瓜の実が棚からぶら下がる。その下には涼み台を置くと日影ができて避暑の場所になる。同時に今晚はどの南瓜をおかずにするか一目でわかる。実に便利にできていた。トマトも今思うと本当のトマトの味がした。

このように米、麦、野菜もすべて自家生産するようになり、消毒の薬品類は全く使用していないので見栄えは悪くても案心して食べていた。むしろそんな人体に害があるとか

老後の初心

昭和10年代の農村と現在との変わりようを見て、今後、我々高齢者が自らなすべきことはなにか。若者や子供たちに教え・啓発し、より良き未来を作るために努力すべきと考える。

1. 農村風景の今昔

春になると、冬の間じっと耐えていた山々の木々が一斉に芽生え、いろいろの花を咲かせる。里山は、毎年、場所を変えて一斉に木を切り倒し、炭に焼いたり家々の燃料に利用するが、ここでも春は新芽を出して、早く一人前の木になろうとする。澄み切った川のせせらぎも陽光を浴び、光り輝いて見える。夏は泳ぎながらその水を飲む。

田圃は冬の間、霜や雪に打たれてじっとしていた草たちが、春とともに活動を始め、レンゲの花が咲き乱れ、子供の遊びを誘う。大人は牛馬を使って咲き誇るレンゲや、堆肥をすきこんで田植えの準備をする。掘り返した泥の中に、ドジョウやタニシが活動を始める。秋にはこれらが成長してタニシなどは食卓に並ぶことになる。畑も堆肥や人糞の肥やしを入れて、春野菜の種まきをする。このように野も山も春に一斉に目覚め、人々の心を勇気づけてくれる。

現在はこのような自然の営みが、少し変わってきている。里山も木炭や燃料に利用しなくなったので、木や草が一面に生い茂り、また竹が異常に繁殖して、手が付けられなくなったところもある。杉や檜の植林は間伐が行き届かないので、混み過ぎて太くならない。太くなくても国産材は、コスト面で外材に負け、利用されなくなった。昔はきれいだった清流も白く淀み、夏でも水遊びをする状態にはない。田んぼの農薬が流れ込み、田舎まで普及した簡易下水処理の排水が流れ込み、魚の影もほとんど見えない。田んぼは、かつて見渡す限りレンゲの花盛りであったものが、今は見るのも難しくなった。

稲作は耕運機で耕すようになったので、楽な作業になった。また農薬を使うので、病害虫が減り収量が飛躍的に伸びた。反面、農薬の人体への影響が心配されるようになった。畑仕事も機械化され、労力の面では楽になったが、やはり農薬の心配が付きまとうようになった。野菜もビニールハウスで作るようになり、季節感が薄くなった。

このようにみてくると、体が楽になり農作物の収量が増え、改善された面もかなりあるが、農薬の心配や季節感がなくなり、大自然に感動することが少なくなったマイナス面もかなり大きい。

2. 食の安全

現在のような食べ物の安全面について、昔はこれほどまでに考えなかった。無農薬野菜の栽培も、ずいぶん研究されているが、一般に虫の食っていない形の良い野菜を作ろうと思えば、農薬の使用はやむを得ないと考えられる。また養殖の魚や動物には病気にかからないように、抗生物質などの薬品が使われていると聞く。このような食

物を長く取り続けると、人体の基本に何らかの悪影響が出るのではないだろうか。これを表面に出さないために食品表示に偽装が話題になっている。

昔は田畑には堆肥を主として使い、今でいう有機農法が徹底していた。したがって田んぼから流れ出る水には毒性はなく、ドジョウやふな、うなぎが田んぼ周辺でいくらでも獲れた。

鶏は昼間は小屋の外で自由に遊ばせ、虫や自然の草を食べて栄養たっぷりの黄味の濃い、おいしい卵が食べられた。牛馬も牧草や穀物類を食べて育ち、良質の肉を提供してくれた。

今後はあまり経済的なことにこだわらず、もう少し自然を大切に自然の恵みが味わえるように努力する必要がある。これは昔の良い面を知っている我々高齢者の務めだと思う。減農薬農法もこのところかなり普及し始め、消費者に安心を与える努力がされてきていることも事実である。

3. 農業の将来

山野が荒廃し田畑や川に薬品が流れ出して、生物が住みにくくなってきている。農村には後継者がいなくなり、高齢者ばかり。このままでいくと、日本の農業はますます廃れ、食料の自給率アップも掛け声だけで40%を切るのではないかと危惧する。これらの原因はどこにあるであろうか。若者が現在の農業に魅力を感じていないのではないか。

朝早くから夜遅くまではたらく。

休日がない。

機械化されたとはいえ労働と泥にまみれた作業に変わりはない。

農業の収入だけでは家計が成り立たない。

仕事がなく困っている若者でも、このような現実では敬遠してしまう。若者に農業へ目を向けさせるためには

- (1) 組織化できるものは組織化して、働く時間と休む時間をはっきりさせる。
- (2) 農業による収入を一般のサラリーマン並にするための工夫をする。

最も難しい問題ではあるが、安心して食べられる食物を、コストを下げても量産できる

研究をする。これは個人、小規模組織では無理で国の農政の一環で取り上げる。

又新しい魅力のある品種を、次々と生み出す研究を活発化させる。

- (3) 子供のころから農業に親しむ学校教育を考える。

学校で農業教育に関する時間を増やす。

土や作物に親しむための農業実習の時間を作る。

減反で荒れ地にした田畑を貸農園にし、家族で野菜作りを奨励する。

4. 私自身の野菜作りの実践

かつて空き地にしていた70坪ほどの宅地を野菜作りに、その後民間の貸農園を借りて30年余り実践している。

(1) 春夏野菜

菊菜、ほうれんそう、えんどう、にんにく、じゃがいも、人参、きゅうり、茄子、トマト、ゴーヤ、さし豆、スイカ

(2) 秋冬野菜

きゃべつ、白菜、菊菜、ほうれんそう、大根、じゃがいも、小松菜、高菜

(3) 肥料

落ち葉、野菜くずの堆肥および油粕、骨粉、米ぬかを混ぜ発酵させたものを主として使用し化学肥料は発芽初期に少量使用する。

(4) 農薬

原則として使用しないが大根、白菜、キャベツ等には成長の初期最小限の消毒をする。

このようにして作った野菜類は、自家消費はごく一部、ほとんどを身内、知人に消費してもらっている。市販のものに比べ味も結構評価され、有機野菜の理解を深めてもらっている。

おいしい野菜を食べ健康になることのほかに、作る喜びが非常に大きい。草むしりをする、肥料をやる、植物は正直に反応し、生き生きと育ってくれる。野菜が元気に大きくなり、実が大きくなるのを見て、自分も生気をもらえる。効果絶大である。

平成21年3月 記